河内平野における初期方形周溝墓群とその構造

－東大阪市近大山賀遺跡第５次発掘調査の再整理・報告編－

相馬勇介・矢野昌史・荒田敬介・山本　亮・
星野安治・高椋浩史・藤田義成・網　伸也

１．はじめに

近畿地方における弥生時代の墓制に関する研究は、1970 ～ 80 年代の調査で多くの方形周溝墓が報告されたことを契機に進展する。方形周溝墓は、墳丘が残存していない場合が多いものの、近畿地方で検出された方形周溝墓は、木棺や墳丘が流水堆積物によって被覆された状態で検出されることが他地域よりも多い。このような事情により、残存した棺内外から人骨や供献土器等が出土するため、その内実が弥生時代の墓制を詳らかにする上で注目を受けてきた。

方形周溝墓とは、その名の通り、平面形態が方形もしくは長方形を呈する弥生時代の墓であり、その存在は、東京都宇津木向原遺跡の発掘調査を契機として、全国的に認知されるようになる。その後における調査事例の蓄積と研究によって方形周溝墓は、近畿地方を代表する弥生時代の墳墓であることが判明し、親族構造や階層化、造墓過程等が議論されてきた（都出 1989、深澤 1996、大庭 1999、藤井 2001、中村 2004 等）。

近畿大学東大阪キャンパス構内に所在する山賀遺跡（以下、近大山賀遺跡と称す）からも弥生時代の方形周溝墓が検出されている。近大山賀遺跡は、河内平野の中央に位置する縄文～江戸時代の複合遺跡である。当遺跡は、河内湖へ流れこむ長瀬川と楠根川の自然堤防上、もしくはその後背湿地に立地する。このような微高地上や谷底平野には、古くから人々が生活を営んでおり、本学構内には、山賀遺跡の他にも小若江遺跡・上小阪遺跡が所在する。

なかでも、小若江遺跡は考古学史に名を残す著名な遺跡として知られている。遺跡の発見は昭和 15（1940）年と古く、本学の前身である日本大学大阪専門学校の構内整備に伴う地上げ工事（現在の南グラウンド周辺）の際に、多くの土器が出土している。その中から古墳時代初頭の土器が出土したことで小若江遺跡が注目をあびることとなる（坪井 1956）。

その後、昭和 30（1955）年代に小若江遺跡から出土した土器が整理され、古墳時代前期における土器の実態が明らかとなった。その成果は、昭和 34（1959）年に発行された平凡社刊行『世界考古学大系』第３巻で、古墳時代前期の土器として「小若江Ⅰ式」土器、それに続く古墳時代後期の土器として「小若江Ⅱ式」土器が提唱され、古墳時代の土器研究に大きく寄与することとなる（横山 1959）。昭和 43（1968）年には、昭和 15（1940）年に出土した小若江遺跡出土の古墳時代の土器群が東大阪市指定文化財に登録されている。

河内平野における弥生時代の墓制を検討するにあたり、平成６（1994）年度に調査した近大山賀遺跡第５次発掘調査で弥生時代前半期の方形周溝墓を８基検出しているため、本稿では、この報告を兼ねて考察する。この調査成果は、長らく未報告のままであったが、弥生時代前半期の方形周溝墓に比定でき、墳丘と主体部が残存する希有な事例であることから、その重要性を鑑み、この度、再整理する運びとなった。再整理は、弥生時代の遺構面を対象とし、平成 28（2016）年９月１日から平成 30（2018）年３月末日までの約１年半かけて行った。（網・荒田）

２．調査概要

山賀遺跡は、昭和 46（1971）年に実施した楠根川（第二寝屋川）の河川改修工事の際に発見された。昭和 48（1973）年から大阪文化財センター（当時）が近畿自動車道の建設に伴って発掘調査を実施し、弥生時代の水田や方形周溝墓等を検出している（大阪文化財センター編 1983 等）。昭和 62（1987）年には、村川行弘氏（大阪経済法科大学）が本学附属高等学校の校舎建築予定地で発掘調査を実施し、５世紀末～６世紀初頭の方墳を検出している。この方墳からは、埴輪や副葬品とみられる遺物も出土している（山本編 1989）。

平成６（1994）年、東大阪市若江西新町５丁目３－１に本学附属中学校の校舎建築が計画された。建設予定地は、山賀遺跡の西限付近にあたるため、上述した既存の調査成果から、建設予定地内にも重要な遺構・遺物が拡がるものと予想された。そのため、文化財保護法および関係法令に基づいて所定の手続きを踏み、東大阪市教育委員会に校舎建設予定地内での試掘調査を依頼した結果、発掘調査が必要との指示を受けた。

これを受けて、本学の例規に従い、教職員等で構成する遺跡調査運営委員会を設置した。文芸学部助教授の高橋龍三郎（現･早稲田大学文学学術院文学部教授）を調査担当者とする遺跡学術調査団を結成し､発掘調査にあたる方針を決定した。発掘調査は、文化庁から許可を得たのち、平成６（1994）年 11 月 30 日に着手した。調査対象面積は、校舎建設によって基礎梁の敷設される約 890㎡である。

発掘調査は、現地表面から表土、盛土、耕作土を重機で掘削し、近世の遺構面から人力で掘削した。遺構の記録は、調査地内に測量用基準点を設置し、それをもとに遺構平面図・断面図を作成した。遺構平面図・断面図の写真撮影は、35㎜、６×７判、４×５判のモノクロ・カラーリバーサルフィルムを用いた。

調査期間中、阪神・淡路大震災（平成７（1995）年１月）に遭遇した。それが直接の原因になるのかわからないが、発掘調査を進めるにつれ、土留め用矢板の一部が傾きはじめた。その結果、調査地に隣接する民家の壁土が崩壊する危険が生じた。また､附属中学校の開校が平成８（1996）年４月と告知されていたため、新校舎建設の工期上、限られた調査日数しかない中、予想外の重要な遺構・遺物が出土し、調査を急ぐ必要に迫られた。平成７（1995）年４月末日に東大阪市教育委員会の終了確認を受けて、現地での調査を完了した。

調査の結果、５つの遺構面を検出した。主な遺構は、第１遺構面が近世の掘立柱建物、第２遺構面が中世の掘立柱建物と井戸、第３遺構面が古墳時代～古代の掘立柱建物・井戸・埴輪溜まり、第４ａ遺構面が弥生時代後期の自然流路、第４ｂ遺構面が弥生時代前半期の方形周溝墓である（註１）。（藤田）

３．近大山賀遺跡の位置と環境

（１）地理的環境

近大山賀遺跡が所在する河内平野の形成過程は、縄文時代前期に海水面が上昇し、河内湾が形成されたことにはじまる。その後、旧淀川と旧大和川の沖積作用によって上町台地北方に砂嘴が発達し、縄文時代後期には、河内湾から河内潟となる。縄文時代晩期～弥生時代前期には、再び砂嘴が発達することで湾と潟との水路口が塞がれていく。その結果、河内潟は河内湖へと変化し、その後も旧大和川水系の沖積作用が続くことで湖は徐々に埋没していく。1704 年には、大和川の付け替え地業が行われ、新開池、深野池等の干拓事業を経て、ほぼ現在の河内平野となる。このような来歴の中、当遺跡は、旧大和川水系の支流である旧玉串川と旧長瀬川の沖積作用によって形成された谷底平野に営まれている（図１）。

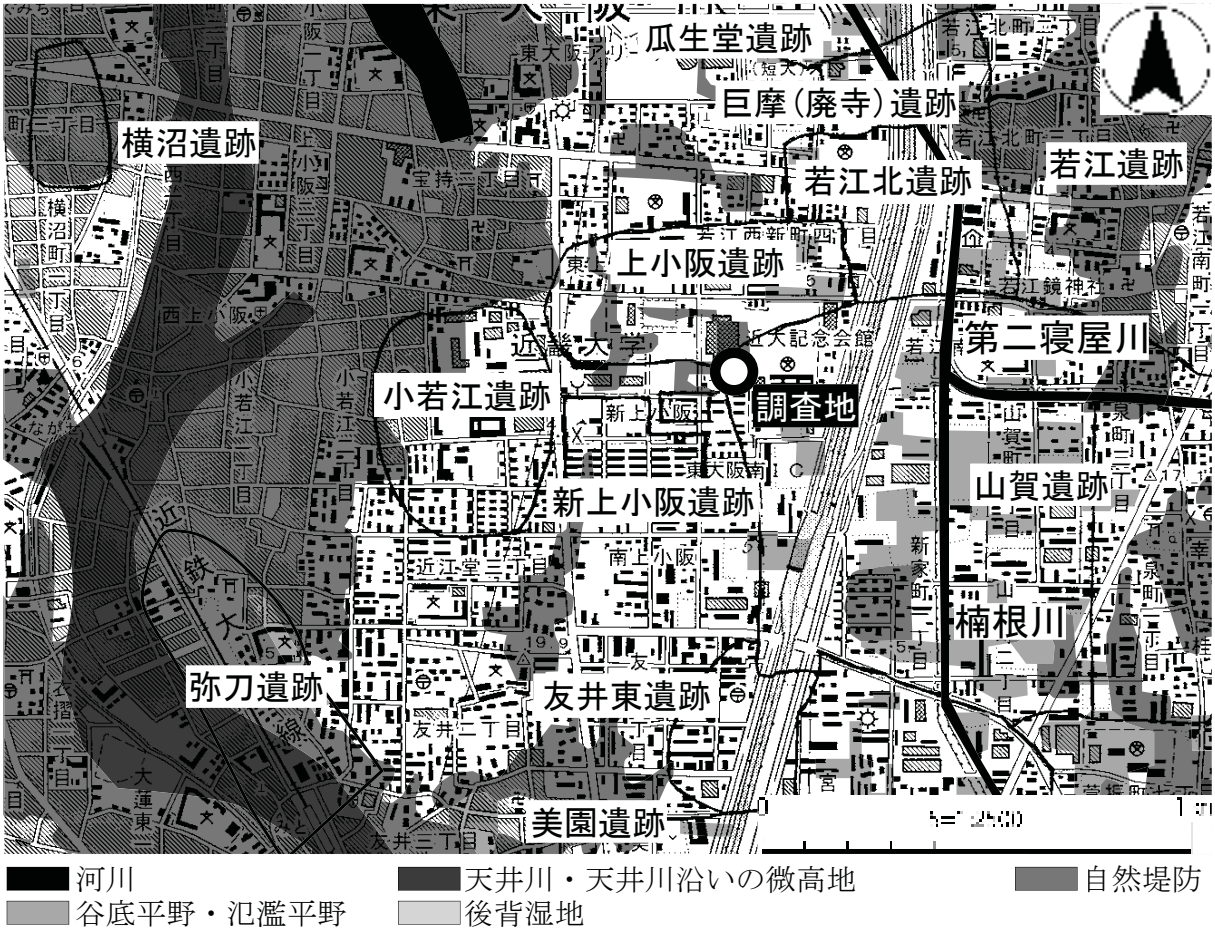


図１　調査地位置図（国土地理院土地条件図を再トレース）

（2）歴史的環境

山賀遺跡は、東大阪市から八尾市に拡がる縄文時代晩期～江戸時代にかけての複合遺跡である。ここでは、山賀遺跡周辺における弥生時代の遺跡を概観する。

前期の遺跡は、若江北遺跡・美園遺跡等がある。若江北遺跡では、前期前半の集落が検出されている。美園遺跡は、前期末～中期初頭を中心に機能し、瓜生堂遺跡からもこの時期の集落が検出され、はやくから谷底平野を南北に利用した集落が展開している。

中期の遺跡は、瓜生堂遺跡・巨摩遺跡・山賀遺跡等がある。これらの遺跡からは、中期後半の方形周溝墓が多数見つかっており、瓜生堂遺跡では、大阪湾型銅戈や鳥形木製品といった特殊遺物も出土している。山賀遺跡は、前期前半に集落としての盛期を迎え、中期初頭に方形周溝墓が築造されている。隣接する新上小阪遺跡でも中期後半の方形周溝墓が検出されており、調査地周辺が集落域から墓域へと変化している。

後期の遺跡は、上小阪遺跡・巨摩遺跡・山賀遺跡等がある。巨摩遺跡は、一つの方形周溝墓上に複数の木棺が設置されており、継続的に墓域として利用されている。この時期の山賀遺跡は生産域となり、河川に伴う堰の存在から、幾度も氾濫する河川と闘っていた弥生人の治水技術がうかがえる。（矢野・相馬・荒田）

4．調査成果

本項では、近大山賀遺跡第５次発掘調査で検出した弥生時代の遺構面を中心に報告する。弥生土器の時期については、寺沢　薫氏と森井貞雄氏の編年（寺沢・森井 1989）に従う。

（1）基本層序（図２）

第Ⅰ層：現代の堆積層。層厚は、10～40㎝。

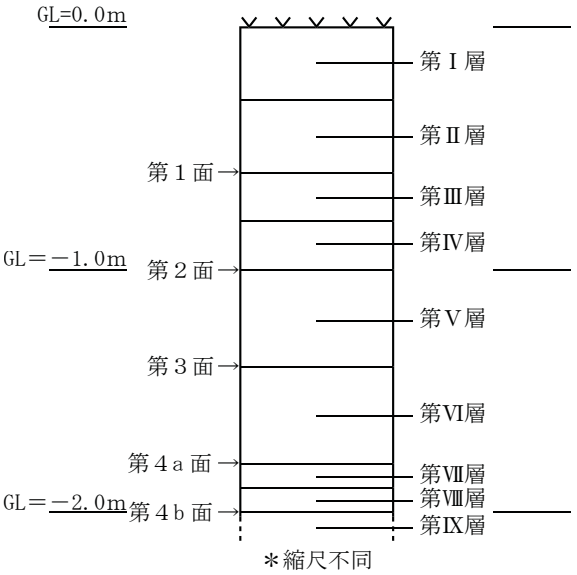


図２　基本層序

第Ⅱ層:近代の旧耕土層。オリーブ灰色粘質土を主体とする。層厚は、20～40㎝。

第Ⅲ層：第１遺構面。近世の包含層。灰オリーブ色粘質土を主体とする。層厚は、10～30㎝。

第Ⅳ層：中近世の包含層。灰オリーブ色粘土・オリーブ灰色粘質土を主体する。層厚は、20～40㎝。

第Ⅴ層：第２遺構面。中世の包含層。シルト～砂礫が多く混じる黒褐色粘質土を主体とする。層厚は、20～70㎝。

第Ⅵ層：第３遺構面。古墳時代～平安時代の包含層。オリーブ褐色シルトを主体とする。層厚は、20～50㎝。第３遺構面で検出した遺構は、主軸を揃えた掘立柱建物群と自然流路が古代にあたり、円筒埴輪・形象埴輪が出土した遺構が古墳時代にあたる。第Ⅵ層は、調査区各所で層厚に差があり、一部、第Ⅶ層と重複している。

第Ⅶ・Ⅷ層：第４ａ遺構面。弥生時代中期後半～終末期の洪水堆積層。第Ⅶ層は灰色粘質土、第Ⅷ層は褐色シルトを主体とする。層厚は、ともに約10㎝。第４ａ遺構面で検出した遺構は、自然流路１条で遺物の出土量は少ない。なお、第４ａ遺構面を精査した段階で、第４ｂ遺構面で検出した方形周溝墓の墳丘上面が一部露出していた。

第Ⅸ層：第４ｂ遺構面。弥生時代前期末～中期前葉を中心とする遺構を検出。暗オリーブ灰色シルト～粘土を主体する。層厚は、10～20㎝。第４ｂ遺構面では、方形周溝墓や斜行溝、土坑等を検出している。

（２）第Ⅵ～Ⅷ層出土の遺物

第Ⅵ～Ⅷ層は、第３・４ａ遺構面を検出しており、この層中から弥生時代中期後半～終末期の遺物が出土している。以下、発掘調査時の取り上げ順を踏襲し、第Ⅵ・Ⅶ層と第Ⅶ・Ⅷ層に分けて出土遺物の概要を記述する。

第Ⅵ・Ⅶ層　弥生時代後期初頭～終末期の遺物（図３－１～８）と朝顔形埴輪の破片が１点出土している。この埴輪片は、第Ⅵ層中のものとみられる。１・２は、タタキ調整が施された甕形土器である。頸部にタタキ調整が施された「口縁タタキ出し技法」が確認できることから、第Ⅵ－２様式以降に比定できる。７

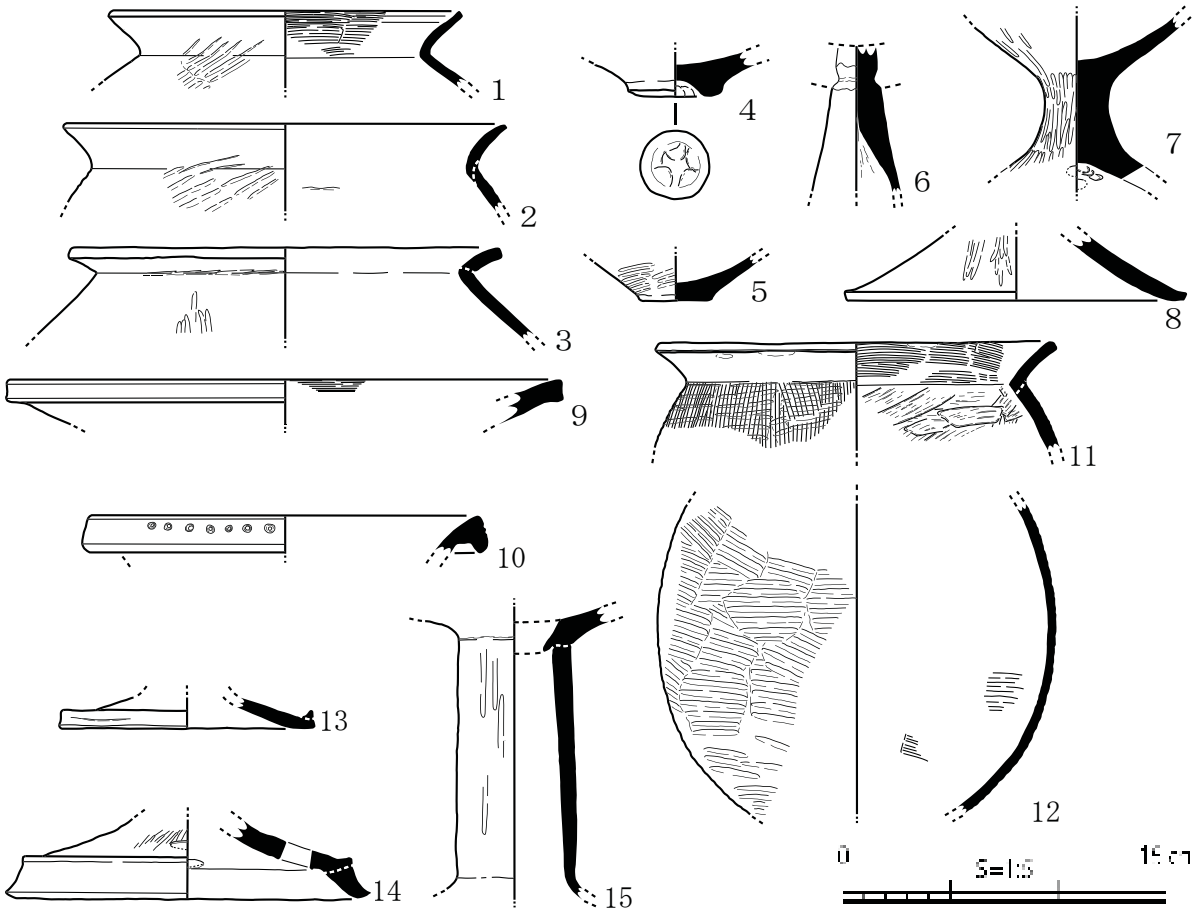


図３　第Ⅵ～Ⅷ層出土遺物（第Ⅵ・Ⅶ層：１～８、第Ⅶ・Ⅷ層：９～15）

は、坏部が深い椀形の高坏で、後期古段階には確認できない型式であり、後期半ばから終末期に比定できる。

第Ⅶ・Ⅷ層　　弥生時代中期後半～終末期にかけての遺物が出土している（図３－９～15）。中期後葉に属するとみられる生駒山西麓産の土器片が出土しているが、細片のため図示できなかった。11は、口縁端部に不明瞭な面を形成する甕形土器である。胴部外面には、タタキ調整の後に縦方向のハケ調整を施している。胴部内面には、ケズリ調整が施されている。庄内形甕の影響を受けたものである。15は、高坏の脚部である。中央部分が膨らむ柱状を呈する。坏部の接合面は、円板充填法の痕跡が残る。脚部と坏部を欠損するが、後期初頭に出現する加飾高坏の一群に含まれるものと考えられる。第Ⅴ－０～１様式に比定できる。

図４　第４ｂ遺構面全景（東から）

（３）第４ｂ遺構面検出の遺構と遺物

Ａ　概要

第４ｂ遺構面は、弥生時代前期末～中期前葉を中心とする時期に比定できる。検出した遺構は、方形周溝墓（ＳＺ）８基、自然流路（ＮＲ）１条、溝（ＳＤ）４条、土坑（ＳＫ）１基、性格不明遺構（ＳＸ）５基（内訳：土坑状遺構１基、人為的盛土２基、自然地形の可能性がある小丘２基）である（図４・５・註２）。

遺構面の標高は、最も低い箇所でT.P.+0.1ｍ、最も高い箇所でT.P.+1.3ｍを測る。西が高く、東が低い地形であり、楠根川に向かって傾斜している。

B　方形周溝墓の概要

今回検出した方形周溝墓は、平面形態が方形もしくは長方形を呈するもので、主体部は、１つの方形周溝墓に１基という構成である。墓壙は断面舟底状を呈し、墓壙の設置は墳丘先行型（吉井2002）である。墓壙内には、木棺が一部残存する。墳丘主軸と墓壙長軸は基本的に平行し、墓壙長軸は、東西方向を向く傾向にあるが、ＳＺ401・408の長軸のみ他と異なる（表１）。墳丘は、周溝を掘削して築造しており、その周溝は、方形周溝墓間で共有しているものもある。周溝は、ＳＺ403のように中央が幅広く、墳丘隅へ向かうにつれて幅が狭くなるものと、ＳＺ404のように一定の幅で周溝を廻らせるものがある。また、ＳＺ403のように周溝を墳丘

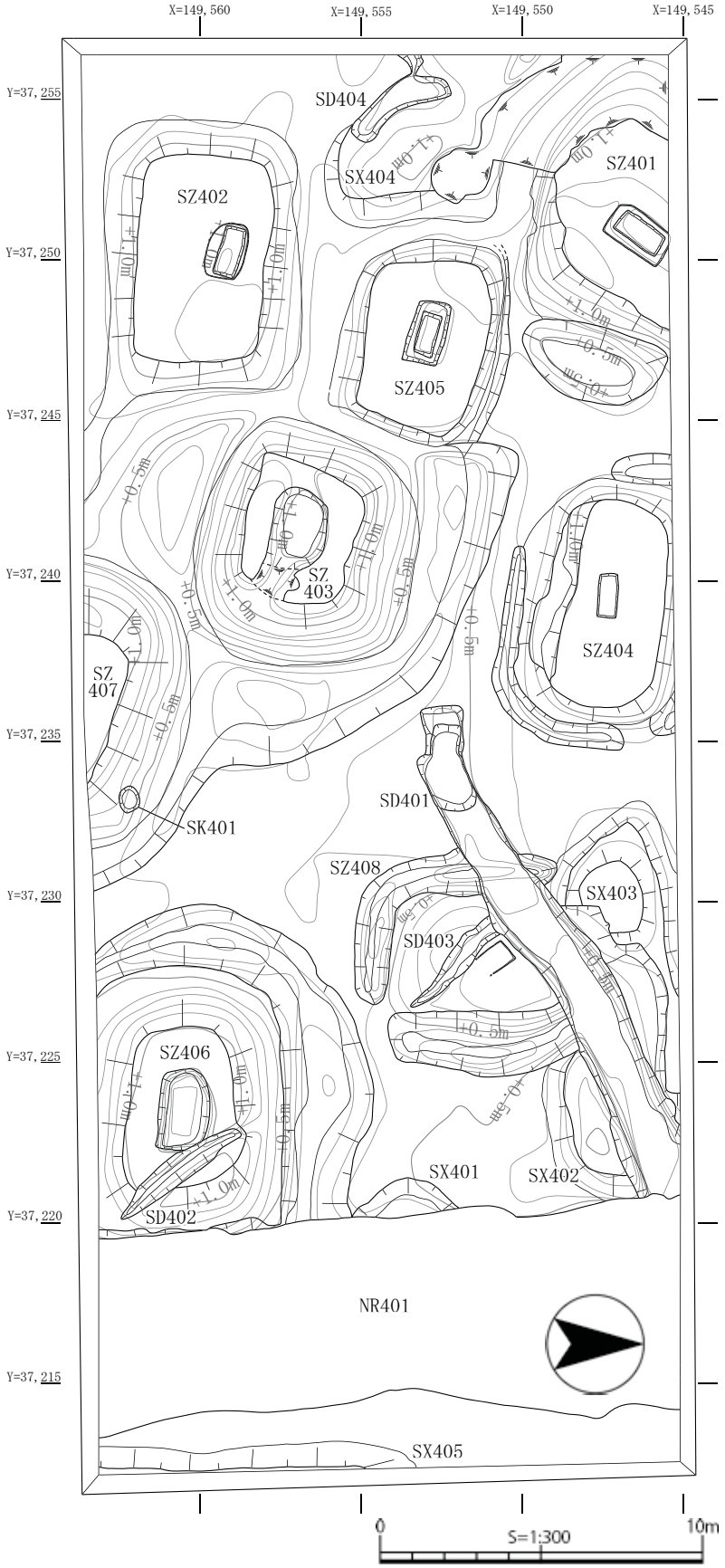


図５　第４ｂ遺構面平面図

の周囲に途切れることなく廻らせるものと、ＳＺ 404 のように途切れながら墳丘の周囲を廻るものに分けられることから、周溝の掘削方法に一定の共通性が認められる。周溝同士の切り合い関係が認められるのは、ＳＺ 401 ～ 403・405・407 である（図５）。

周溝埋土は、上層と下層に分けられる。

各周溝の上層は、いずれも砂礫が多量に混じるオリーブ灰～暗緑灰色粘土を主体とし、周溝の底へ向かうにつれて砂礫の密度が高くなる。各周溝の上層の厚さは、約 40 ～ 50㎝である。なお、ＳＺ 406 西周溝上層は、灰白色砂礫層を主体とし、粘土は混じらない。上層は約 70㎝あり、他の周溝上層よりも厚い。ＳＺ 406 西周溝埋土は、ＮＲ 401 埋土と土質が類似することから、ＮＲ 401 がＳＺ 406 にオーバーフローしている可能性がある。

各周溝の下層は、いずれも植物質が多量に混じる暗オリーブ灰～黒色粘土を主体とし、シルトが一部混じる。植物質は、粘土中に混ざっており、周溝の底へ近くなるにつれて多くなる。このような状況から、周溝はすぐに埋没せず、湿地状に変化してから埋没したと考えられる。各周溝下層の厚さは約 10 ～ 20㎝だが、ＳＺ 406 西周溝下層は約 40㎝あり、他の周溝下層埋土よりも厚く堆積している。また、ＳＺ 404 南周溝下層の厚さは約 10㎝ほどで、部分的にしか残存しておらず、ＳＺ 403 側へいくにしたがって、植物質の量が多くなる。方形周溝墓に伴うと考えられる遺物の多くが周溝の底に接した状態、もしくは下層中から出土しているため、周溝内下層出土の土器は、方形周溝墓が機能していた時期とほぼ併行すると考えられる。

Ｃ　墳丘構造

墳丘の築造には、共通して周溝掘削土（灰～暗オリーブ灰色粘土あるいはシルトが主体）が用いられており、その墳丘の盛り方には、少なくとも２つのパターンが認められる（図６）。一つは、墳丘の中心から外へ向って水平に盛土するもので、ＳＺ 401・407 に認められる。もう一つは、墳丘の外縁となる部分に高さ 20 ～ 30㎝の土手状盛土を構築した後、その内部を水平に盛土して、最後に土手状盛土の上部および外周を盛土で覆うもので、ＳＺ 403・406 に認められる。本

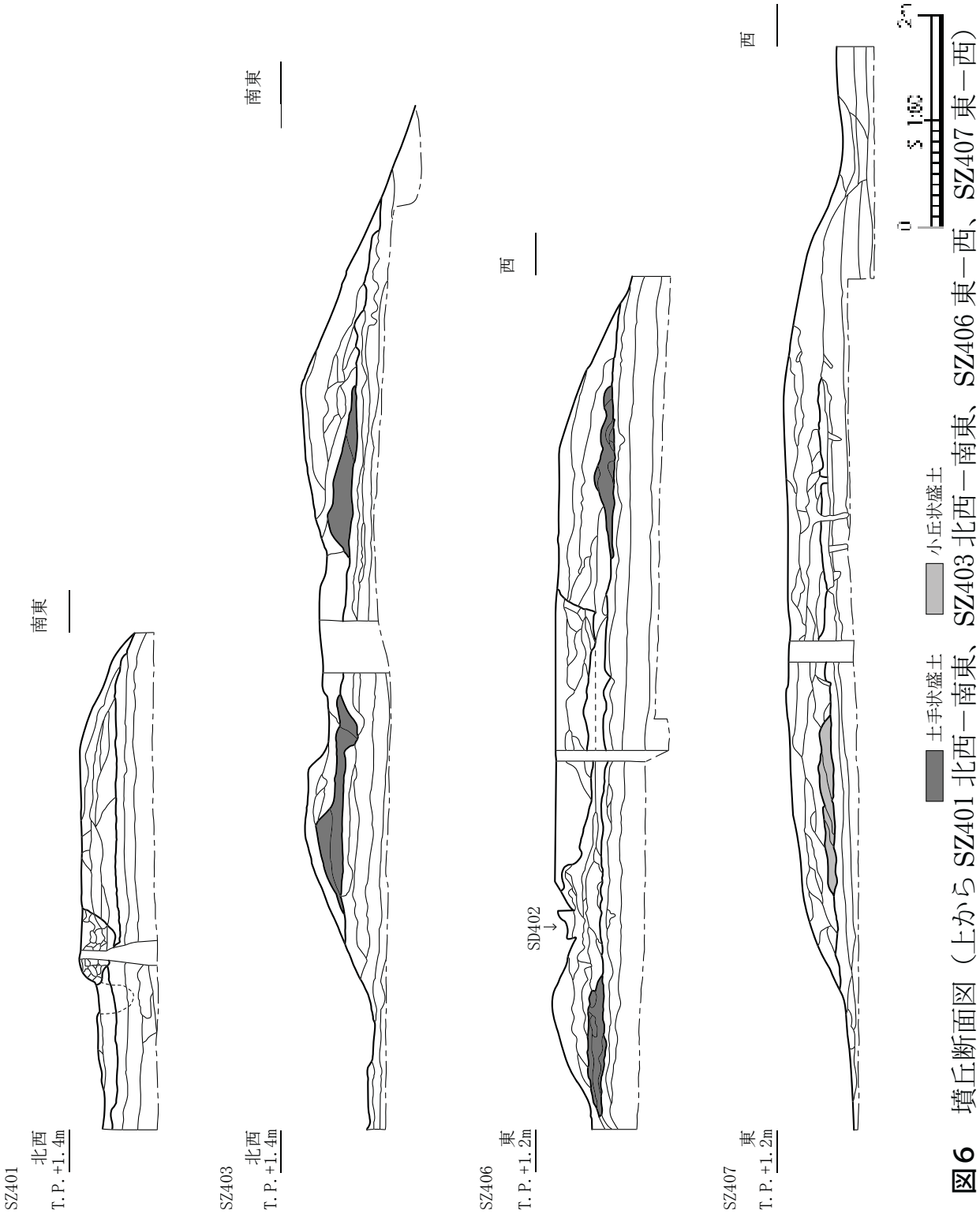


図6 墳丘断面図（上から SZ401 北西－南東、SZ403 北西－南東、SZ406 東－西、SZ407 東－西）

例については、加美遺跡Ｙ１号墳丘墓と類似した築造法といえる（趙 1999）。これらの墳丘築造法は、今回検出した他の方形周溝墓にも認められるが、出土遺物からみて、墳丘築造技術に時期差は見出せなかった。

表１　検出した方形周溝墓一覧

遺構	規模（m）				主軸		墓壙（cm）	
	周溝墓		台状部		墳丘	主体部	長軸長	短軸長
ＳＺ401	6.6+	6.4+	5.2+	5.0+	N-33°-E	N-32°-E	204	118
ＳＺ402	6.8	9.4	3.9	6.4	N-86°-W	N-74°-W	181	122
ＳＺ403	7.1	7.8	3.7	4.5	N-74°-W	N-84°-W	263	177
ＳＺ404	5.7+	7.9	3.6	6.4	N-83°-W	N-87°-W	140	63
ＳＺ405	4.9	6.4	3.7	5.4	N-74°-W	N-75°-W	202	117
ＳＺ406	7.9+	9.3+	6.3+	8.4+	N-90°-W	N-84°-W	261	183
ＳＺ407	4.0+	9.2+	1.7+	5.0+	-	-	-	-
ＳＺ408	6.5+	5.7	5.6+	3.9	N-1°-W	N-39°-W	99+	74+

＊「+」は現存長
＊「-」のみの欄は不明

Ｄ　方形周溝墓の各部と出土遺物

方形周溝墓から出土した遺物は、主体部（木棺）・墳丘上面・墳丘斜面・墳丘内（盛土内）・周溝内に分けて取り上げられている。以下、この区分に従って、方形周溝墓各部の遺構とその出土遺物について報告する。なお、当遺構面から出土した石器は、すべて二上山産サヌカイト製だが、一部、産地や材質が異なる石製品もあるため、そのような事例の石材は、個別に言及する。

ＳＺ 401　　木棺墓１基を検出している。北西の棺材が残存していたが（図７・８）、人骨は出土していない。棺材は、残存長 153㎝、高さ 46㎝、厚さ３㎝で、出土当時から遺存状況が悪く、木棺型式も不明である。

墓壙内からは、小口板や長側板をはめ込む溝状遺構が検出されていないため、組み上がった木棺を墓壙内に入れただけとみられる。墓壙内からは、４点の弥生土器が出土している。出土状況は不明だが、他の方形周溝墓から出土している弥生土器の性格からみて、本例も供献された可能性がある。

墳丘上面および墳丘内からは、第Ｉ－４～Ⅱ－１様式の土器（図９－16～

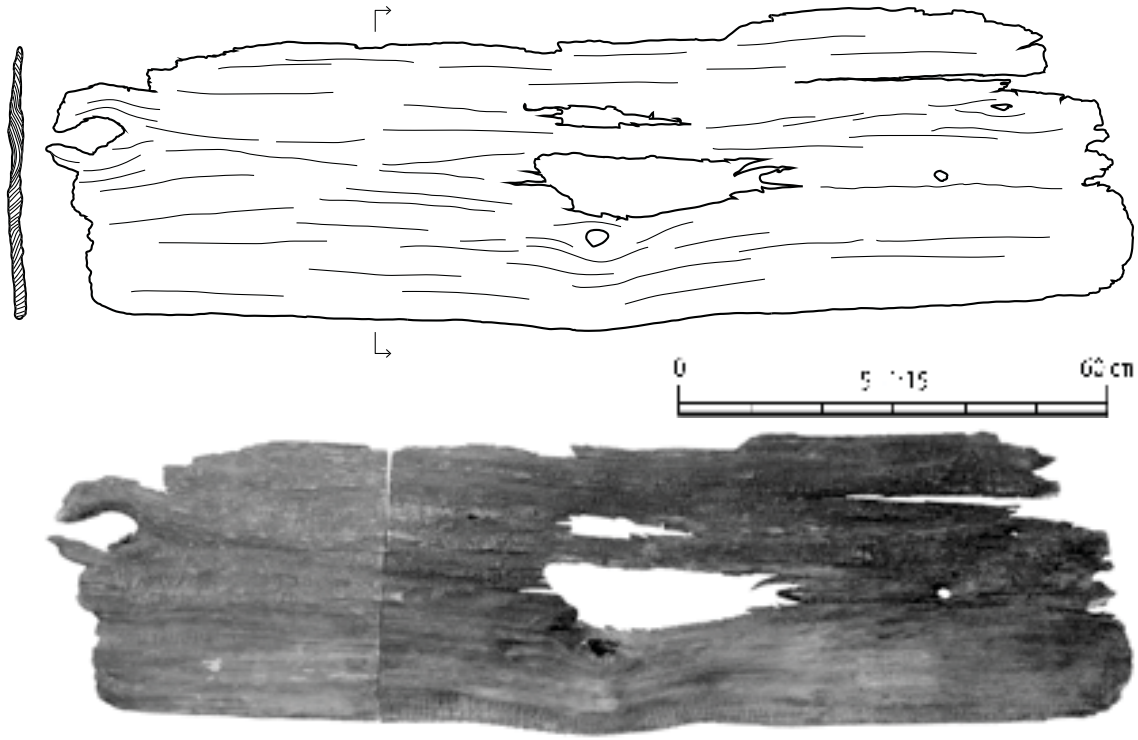


図７　ＳＺ 401 木棺長側壁板実測図

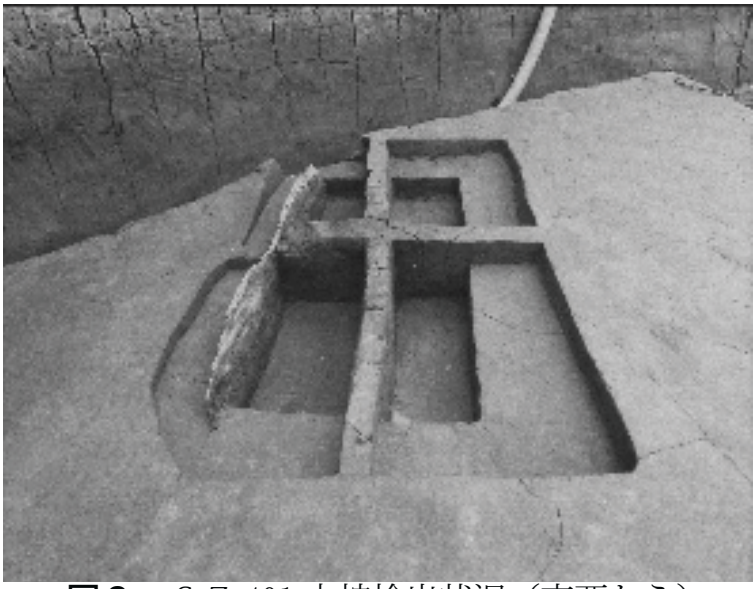


図８　ＳＺ 401 木棺検出状況（南西から）

20）と剥片３点が出土している。20 は、鉢形土器である。胴部成形時に作られる擬口縁の外面に微量の粘土を加えながら、断面円形の粘土紐をユビナデおよびユビオサエで貼り付けることで口縁部を整形している。このような技法は、東大阪市高井田遺跡に類例があり、無文土器の製作技法と関連する可能性が指摘されている（萩田・桑原 1963、秋山 2007）。

東周溝からは、細片となった土器片と剥片が２点出土している。

南周溝からは、第Ｉ－４～Ⅱ－１様式の土器（図９－21 ～ 29）と石器（図 34

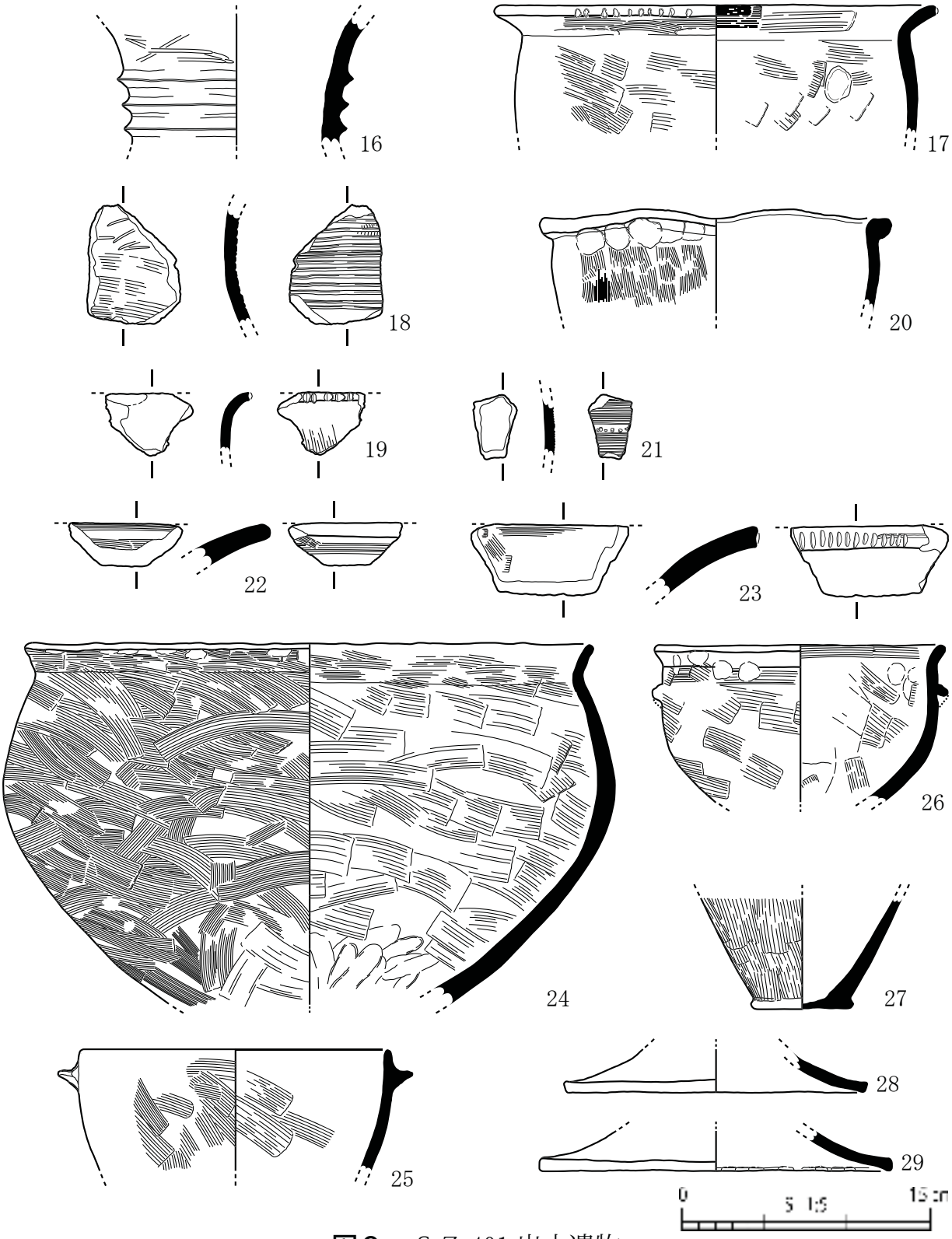


図９　ＳＺ 401 出土遺物
（墳丘内：16・17、墳丘上面：18 ～ 20、南周溝内：21 ～ 29）

－１・２）が出土している。この遺構から出土したすべての土器が周溝の底に接

するか、周溝下層から出土している。21は、壺形土器の胴部片である。２条の櫛描直線文とその間に刺突文が施されており、第Ⅱ－１様式に比定できる。24は、第Ⅰ－４様式の大型鉢である。周溝内出土の土器は、残存率の低い破片が多く、図22－69（ＳＺ405）や図27－85・88（ＳＺ408）のような残存率の高い土器は少ない。東・南周溝内から出土した土器は、第Ⅰ－４～Ⅱ－１様式に比定できる。石器は、１がＳＺ405と周溝を共有する南周溝底から出土した完形の凸基式打製石鏃である。全長29㎜、最大幅10.5㎜、厚さ3.5㎜、重量１ｇ。２は、南周溝底から出土した完形の凸基式打製石鏃である。鋒を鋭利に伸ばした加工をする石鏃で、久宝寺遺跡（森屋・亀井編2007・福佐編2013）や新上小阪遺跡（島崎編2007）に類例があり、この地域に特徴的な石鏃として位置づけられる。本例は、久宝寺例のように刃部を鋸歯状に加工していない。全長50.5㎜、最大幅14.5㎜、厚さ３㎜、重量２ｇ。この他、剥片２点、石鏃１点が出土している。

これらの諸点からＳＺ401は、弥生時代中期初頭に比定できる。

ＳＺ402　木棺墓１基を検出している（図10）。明確な掘方は検出しておらず、赤色顔料が散布されていたことから、その範囲を目安に掘削を行ったところ、墓壙の下端と人骨が出土した。墓壙は、基盤層を掘り抜いている。人骨は、頭蓋骨・大腿骨・脛骨・腓骨が遺存しており、東頭位で膝を曲げた状態で埋葬されていた。脚部は、左右のどちらにあたるかは不明である。脛骨の間には、長さ15cm、幅３㎝、厚さ0.2㎝の木片が入り込んでいた。木棺と被葬者の腐朽後に偶然入り込んだ可能性がある。被葬者は、成人女性とみられる。図34－３～６は、棺内から出土している。３は、石錐である。作用部位のみが残存している。現

図10　ＳＺ402人骨出土状況（東から）

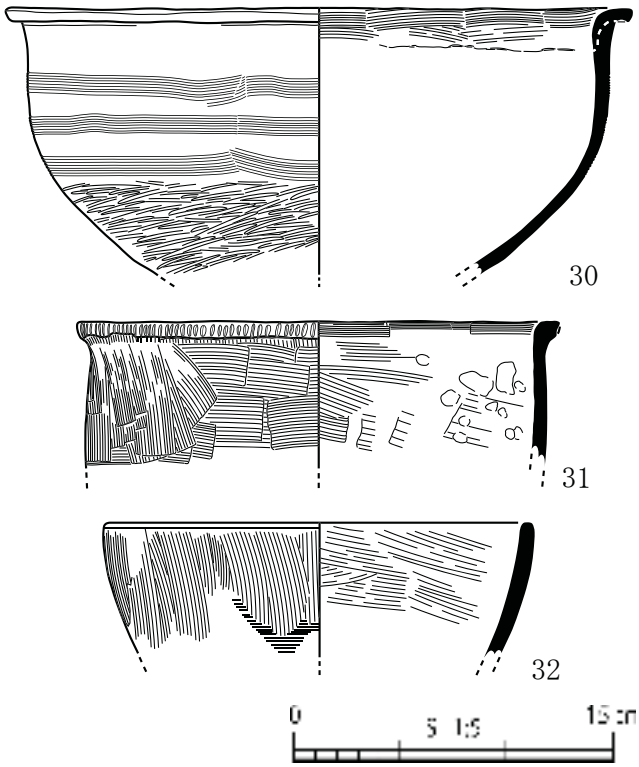


図 11　ＳＺ 402 出土遺物（南斜面：30・31、墳丘上面および東斜面：32）

存長 27.0㎜、最大幅 8.0㎜、厚さ 4.5㎜、重量１ｇ。４は、器種不明だが、先端が鋭利に加工されていることから、石錐の可能性がある。全長 27㎜、最大幅 9.0㎜、厚さ 2.5㎜、重量１ｇ。５は、スクレーパーである。刃部片側のみに加工を施している。全長 50.0㎜、最大幅 38.5㎜、厚さ 18.5㎜、重量 28 ｇ。６は、剥片である。全長 34.5㎜、最大幅 40.0㎜、厚さ 11.0㎜、重量 11 ｇ。

墳丘上面および斜面からは、第Ⅱ－１～３様式の土器（図 11 － 30 ～ 32）と石器が出土している。30 は、鉢形土器である。遺構面からやや浮いた状態で出土している。ヘラミガキ調整が密に施された胴部に、３条の櫛描直線文が施されており、第Ⅱ－３様式に比定できる。31 は、外面に粗いハケメが施された甕形土器で、第Ⅱ－１～２様式に比定できる。石器は、剥片１点、二次剥片１点が出土している。

墳丘内からは、第Ⅰ－４様式の土器（図 12 － 33 ～ 38）と石器（図 34 － 7・８）が出土している。32 は、第Ⅰ－４様式に比定できる広口壺である。36 は、底部に焼成後の回転穿孔がある甕形土器である。37 は中型の甕、38 は大型の甕である。37 は、口縁部に刻目文を施し、その内外面をヨコナデ調整している。淀川流域からの搬入品とみられる。大阪文化財センターが調査した山賀遺跡４号墓の墳丘内からも完形の弥生土器が出土しているため（大阪文化財センター編 1984）、34 も墳丘築造時に埋設された可能性がある。38 は、底部を欠損しているが、器高約 40㎝を測る。土器棺の可能性がある。いずれも第Ⅰ－４様式に比定できる。7 は、打製石鏃の身部である。基部が折れているため、型式は不明である。

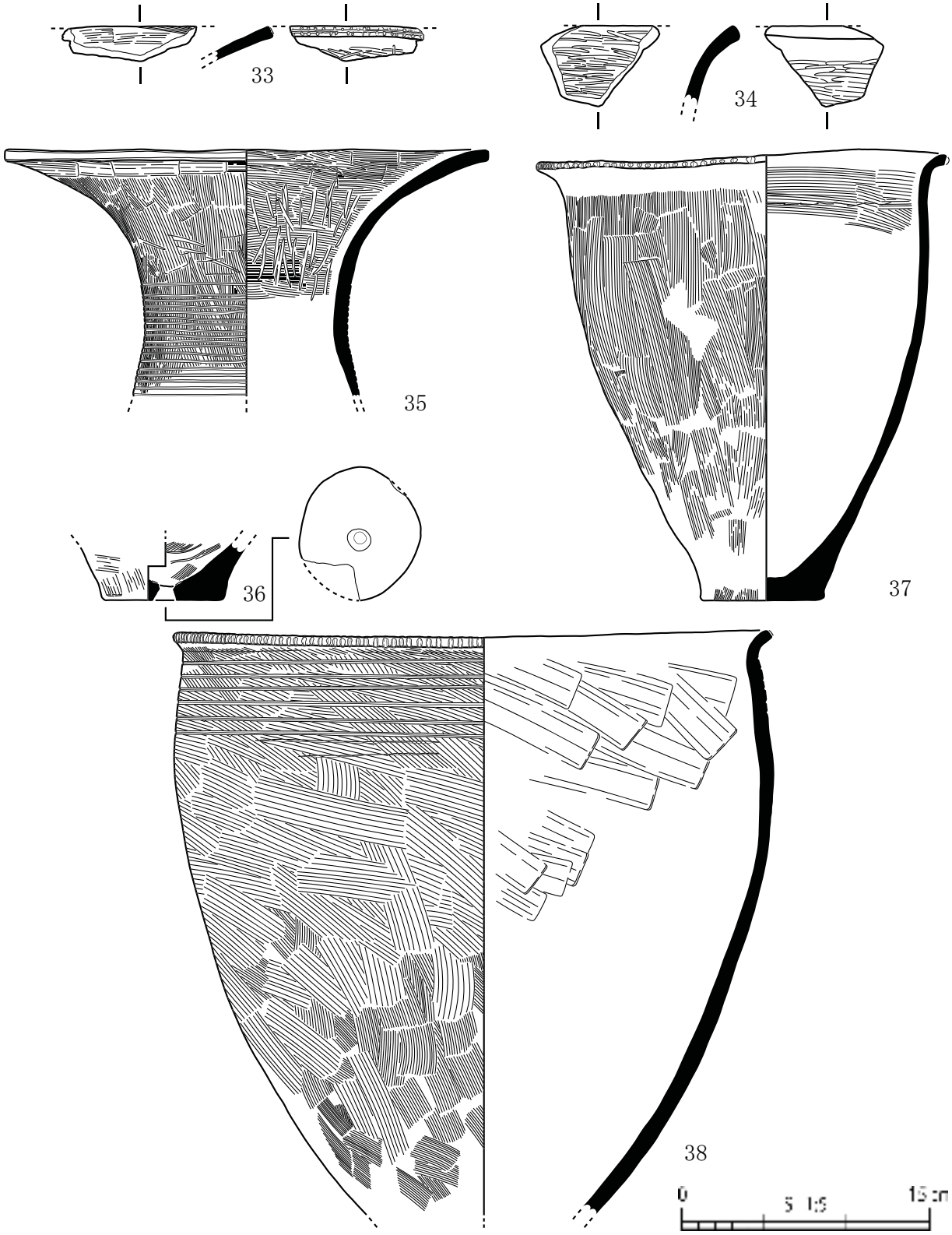


図 12　ＳＺ 402 出土遺物（墳丘内：33 ～ 38）

現存長 20.5㎜、最大幅 11.0㎜、厚さ 5.5㎜、重量１ｇ。８は、凹基式打製石鏃で

ある。片側の逆刺が調査時に欠損している。全長 49.5㎜、最大幅 21.0㎜、厚さ 4.5㎜、重量４ｇ。この他、剥片が１点出土している。

周溝は、北周溝がＳＺ 405 南周溝と共有し、東周溝が後出のＳＺ 403 南周溝に削平され、本来の形を留めていない。西･南周溝は、墳丘斜面を検出したのみで、周溝の掘り方は検出していない。

周溝内から出土した遺物は、北周溝を除くといずれも細片のため、図化できなかった。

北周溝内からは、多数の弥生土器が出土しているが、ＳＺ 405 側に片寄って出土しているため、これらの遺物は、ＳＺ 405 に帰属するものとみられる。図 34－９は、南周溝から出土した凹基式打製石鏃である。鋒がわずかだが縦溝状に欠損している。現存長 20.0㎜、最大幅 19.0㎜、厚さ 3.5㎜、重量２ｇ。

これらの諸点からＳＺ 402 は、弥生時代前期末～中期前半に比定できる。

ＳＺ 403　木棺墓１基を検出している（図 13・14）。底板あるいは蓋板と考えられる棺材が残存しているが、人骨は出土していない。棺材は、長さ 164㎝、幅 44㎝、厚さ 2.5㎝である（図 15）。ＳＺ 401 の棺材と同様、遺存状況が悪い。

墳丘斜面からは、弥生土器（図 16 － 44 ～ 47）と石器が出土している。遺構面に接した状態で出土した 44・46・47 と、遺構面から浮いた状態で出土した 45 がある。45 は、胴部は算盤玉形を呈し、頸部から口縁部にかけて扇形文、櫛描直線文、櫛描波状文が施された壺形土器である。完形に復元できるが、その破片の多くがＳＺ 403 周溝内から出土している。ＳＺ 405 墳丘上面から出土した長軸５㎝×短軸４㎝の頸部片１点と接合している。巨摩・若江北遺跡（三好

図 13　ＳＺ 403 木棺出土状況（西から）

1996）や加美遺跡（大庭 2001）からも類似した出土状況を示す土器が存在する（註３）。第Ⅱ－３様式に比定できる。石器は、南斜面から剥片が１点出土している。

墳丘内からは、弥生土器（図 16 － 39 ～ 43）と石器、木製品（所在不明）が出土している。39 は、断面三角形の貼付突帯がある壺形土器の頸部片である。第Ⅰ－４様式に比定できる。石器は、剥片が６点出土している。

東周溝は、ＳＺ 407 北周溝と接している。図 34 － 11・12 は、凹基式打製石鏃である。11 は､鋒がわずかに折れている。

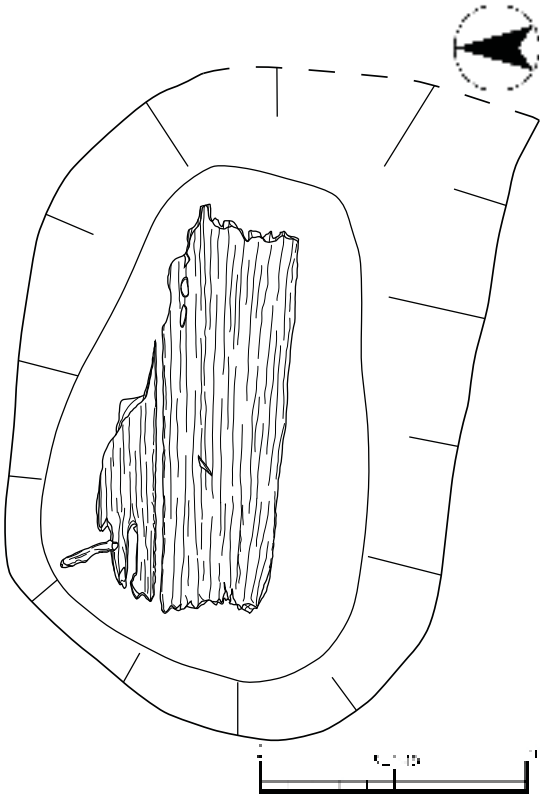


図 14　ＳＺ 403 木棺出土状況

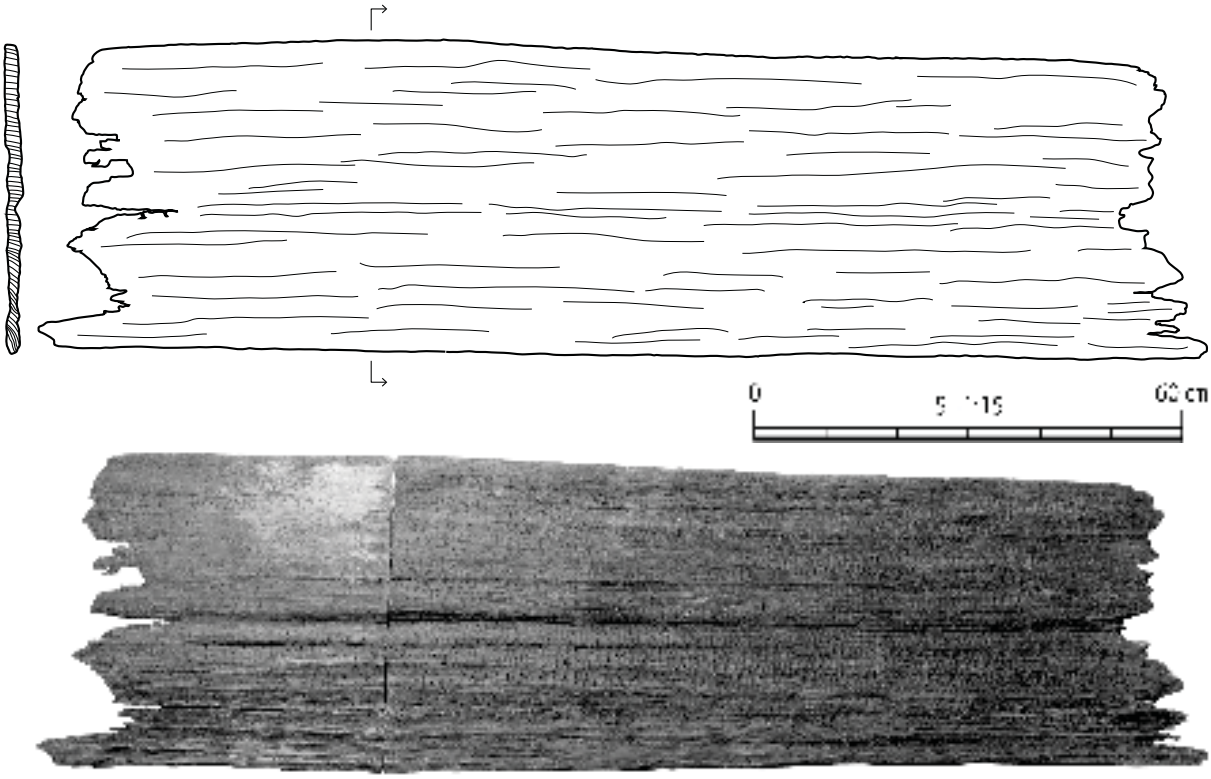


図 15　ＳＺ 403 木棺実測図

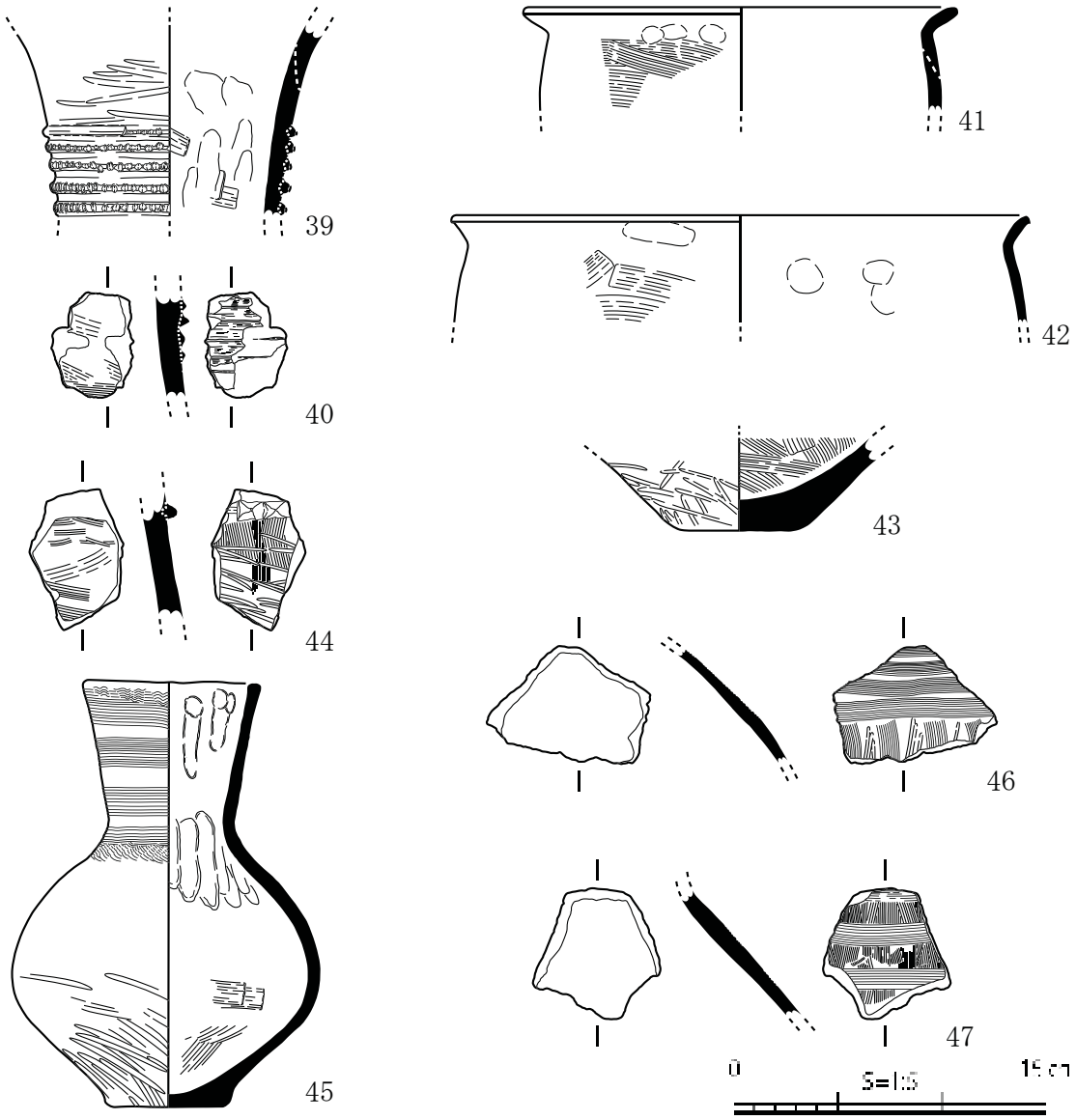


図 16　ＳＺ 403 出土遺物（墳丘内：39 ～ 43、墳丘斜面：44 ～ 47）

現存長 29.0㎜、最大幅 16.0㎜、厚さ 6.0㎜、重量３ｇ。12 は、平基式打製石鏃である。身部は長いが、幅広の刃部であるため、細身とは形容しがたい。鋒が折れている。刃部には、細かな剥離を加えて鋸歯状に整形している。このような鋸歯状剥離には、鉄製工具の使用が想定されている（馬場 2004）。現存長 44.0㎜、最大幅 19.5㎜、厚さ 4.5㎜。重量３ｇ。

西周溝は、ＳＺ 402 東周溝、ＳＺ 405 東周溝と共有している。周溝の共有状況と切り合い関係からＳＺ 403 は、西周溝以外を新たに掘削して墳丘を築造した墳

丘と考えられる。溝内出土の遺物は、器種が特定できない弥生土器の細片が数点と二次剥片が1点出土している。

南周溝は、ＳＺ402東周溝とＳＺ407西周溝に接しているが、いずれもＳＺ403に切られているため、周溝は共有していない。図34－10は、完形の円基式打製石鏃である。基部や刃部の調整をはじめ、全体的に整形があまい。全長24.0㎜、最大幅13.0㎜、厚さ2.5㎜、重量1ｇ。

北周溝は、他の周溝と共有していない。細片の弥生土器と剥片が1点出土している。他の周溝と比べて、遺物の出土量が少ない。

これらの諸点からＳＺ403は、弥生時代前期末～中期前半に比定できる。

ＳＺ404　主体部1基を検出している。棺材と人骨は残存していないが、棺内埋土と墓壙内から打製石鏃が各1点、棺床に張り付いた状態で弥生土器片が出土している（図17）。図35－13は、完形の凸基式打製石鏃である。刃部両面に剥離調整が加えられた優品である。棺内南西側から出土しており、棺床から約3㎝ほど浮いていたが、棺内にあったものとみて差し支えない。出土位置からみて、被葬者の頭部から肩部にあたる位置にあったとみられる。全長34㎜、最大幅14.5㎜、厚さ3㎜。重量1ｇ。図35－14は、完形の円基式打製石鏃である。南長側壁際にあり、棺床から約4㎝ほど浮いて出土している。全長31㎜、最大幅12㎜、厚さ3.5㎜、重量1ｇ。

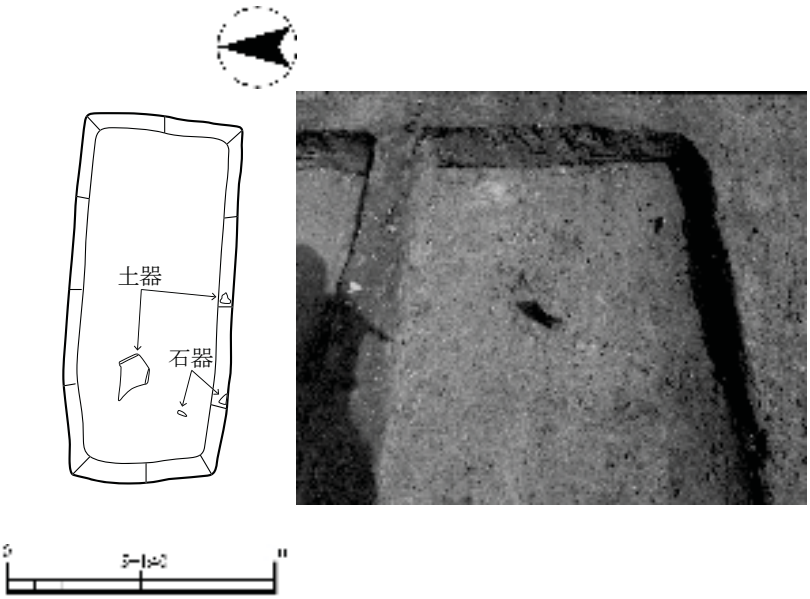


図17　ＳＺ404棺内石鏃出土状況（西から）

墳丘上面（図18－49・50）と墳丘南側の平坦面（幅約90㎝）（図18－52～63）から弥生土器と石器（図35－15～17）が出土している。54は、櫛描直線文が施された壺形土器の胴部片で第Ⅱ様式前半に比定でき

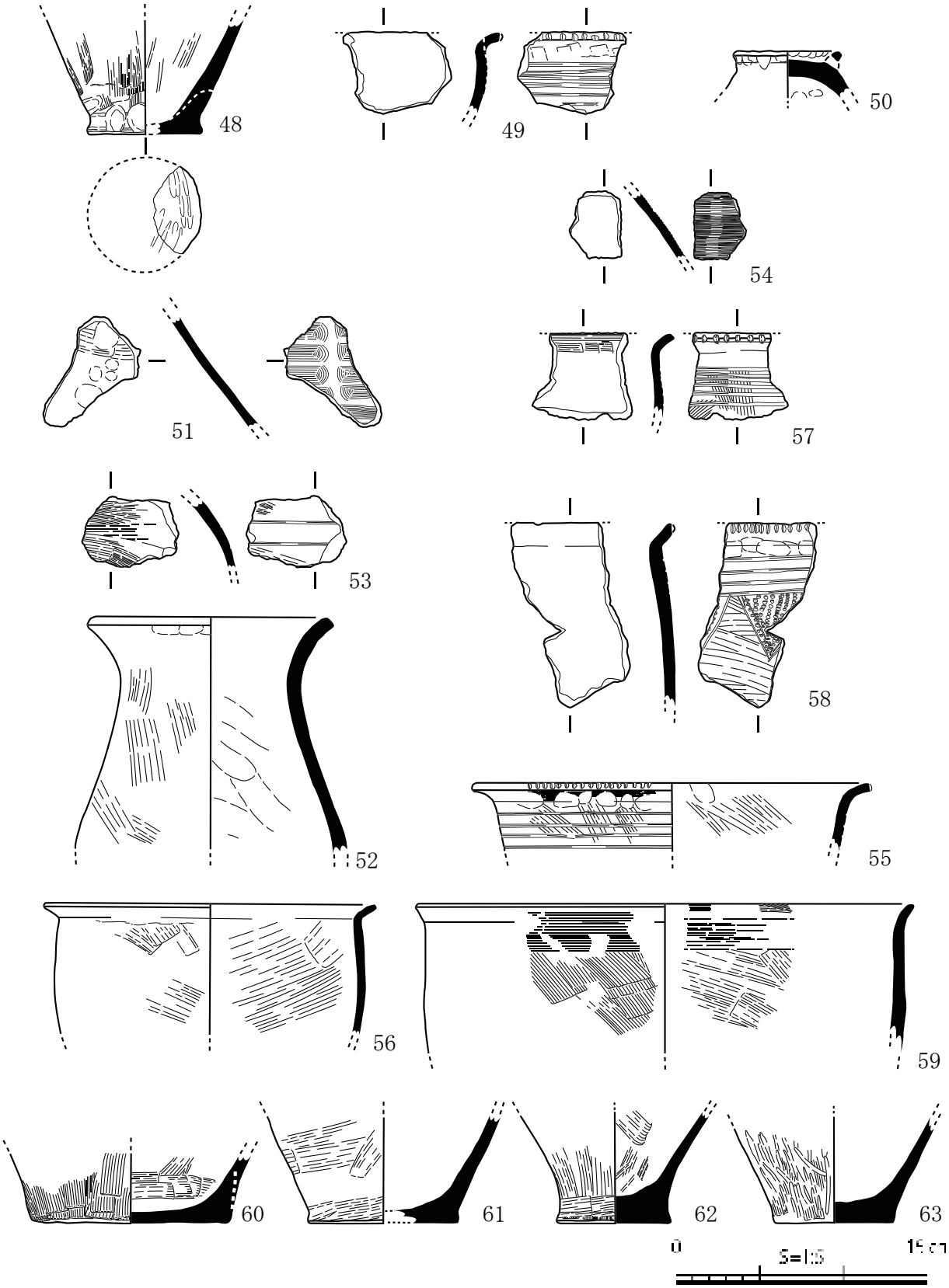


図 18　ＳＺ 404 出土遺物
（墳丘内：48、墳丘上面：49 ～ 50、東周溝内：51、南斜面～平坦面：52 ～ 63）

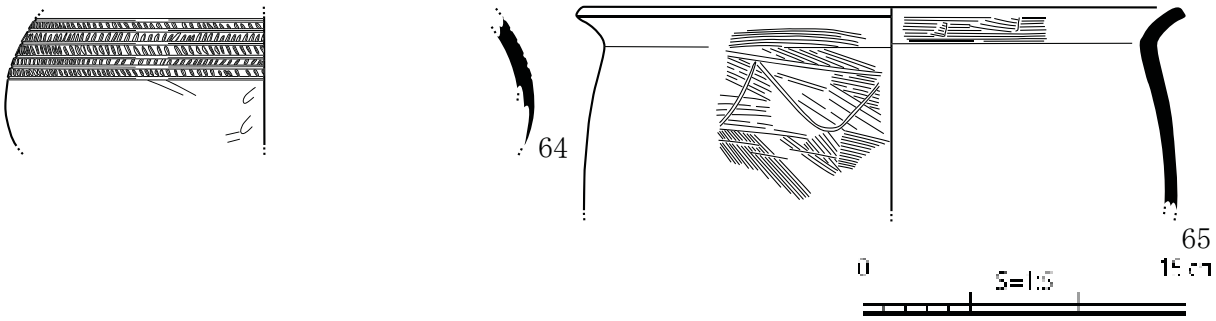


図 19　ＳＺ 404 墳丘内と南斜面出土の土器が接合した事例

る。58 は、甕形土器の上半部片である。風化した金雲母が多量に混じる。口縁端部は、ヨコナデ調整後に縦方向のナデ調整を行い、縦長の刻目文を施文している。胴部には、ヘラ描直線文４条と鋸歯字状の線刻、線刻の間に刺突文が施されている。第Ⅰ－４～Ⅱ－１様式に比定できる。15 は、南西斜面から出土した石錐である。上部が欠損しており、作用部位の片側のみに押圧剥離を施している。現存長 29㎜、最大幅 10㎜、厚さ 5.5㎜、重量１ｇ。16 は、南斜面から出土したスクレーパーの未製品もしくは失敗品である。刃部の整形が両面におよんでいないため、刃部となる部位の整形があまい。全長 32.5㎜、最大幅 47㎜、厚さ８㎜、重量 13 ｇ。17 は、南斜面から出土した二次剥片である。全長 31㎜、最大幅 30.5㎜、厚さ８㎜、重量６ｇ。この他、二次剥片５点、剥片３点が出土している。

墳丘内からは、甕形土器の底部片（図 18 － 48）と南斜面出土の土器と接合した資料（図 19 － 64・65）、打製石鏃（図 35 － 18 ～ 20）がある。墳丘内出土の土器は、第Ⅰ－４様式に比定できる。18 は、墳丘内最上位から出土した凹基式打製石鏃である。片側の逆刺が調査時に欠損している。鋒の整形があまいため、未製品とみられる。現存長 27.5㎜、最大幅 14.5㎜、厚さ 5.5㎜、重量２ｇ。19 は、完形の円基式打製石鏃である。全長 32.5㎜、最大幅 13㎜、厚さ 2.5㎜、重量１ｇ。20 は、尖底式打製石鏃である。鋒が調査時に欠損している。現存長 33㎜、最大幅 11.5㎜、厚さ４㎜、重量１ｇ。この他、石鏃３点、剥片２点が出土している。

周溝は、ＳＺ 401・403 と共有していない。墳丘北東隅と北西隅からは、北周溝にあたる可能性のある溝を検出している。周溝内からの出土遺物は少なく、唯一図化できた資料が東周溝から出土した壺形土器の胴部片である（図 18 － 51）。

51は、櫛描直線文の端に扇形文を施す「擬似流水文」があり、器壁が薄いことから比較的新しい様相を示す。第Ⅱ様式前半に比定できる。

これらの諸点から、ＳＺ404は、弥生時代前期末～中期初頭に比定できる。

ＳＺ405　木棺墓1基を検出している。棺材と人骨は出土していない。墓壙底には、深さ10㎝程度の溝があるため、この溝が棺材を差し込むものとみられることから、木棺墓と判断した。棺内埋土中から完形の凸基式打製石鏃が1点出土している。棺床から約5㎝ほどしか浮いていないため、本例も棺内にあったものと考えられる（図20・21・35－21）。被葬者の頭部～肩部付近で出土している。全長31.5㎜、最大幅13.5㎜、厚さ4㎜、重量2ｇ。

墳丘上面および墳丘斜面からは、弥生土器（図22－67・68）と石器（図35

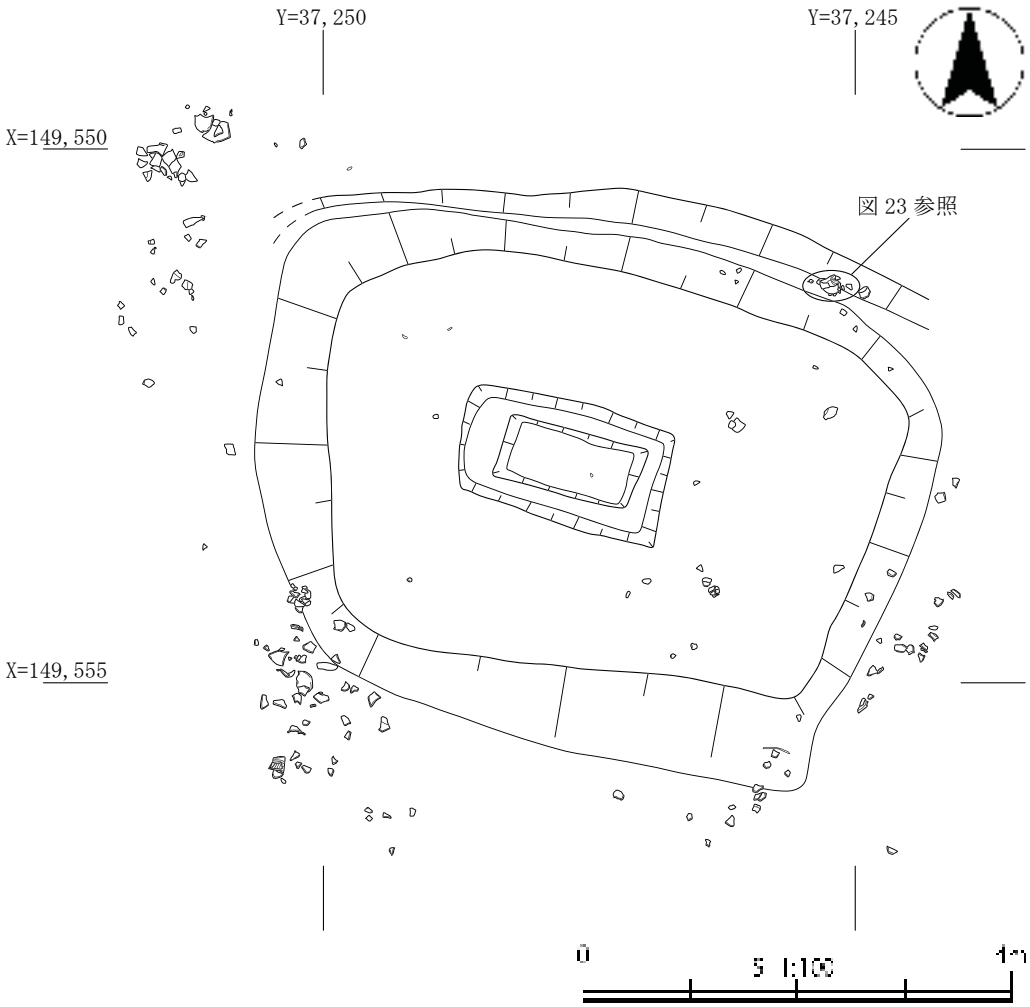


図20　ＳＺ405遺物出土状況

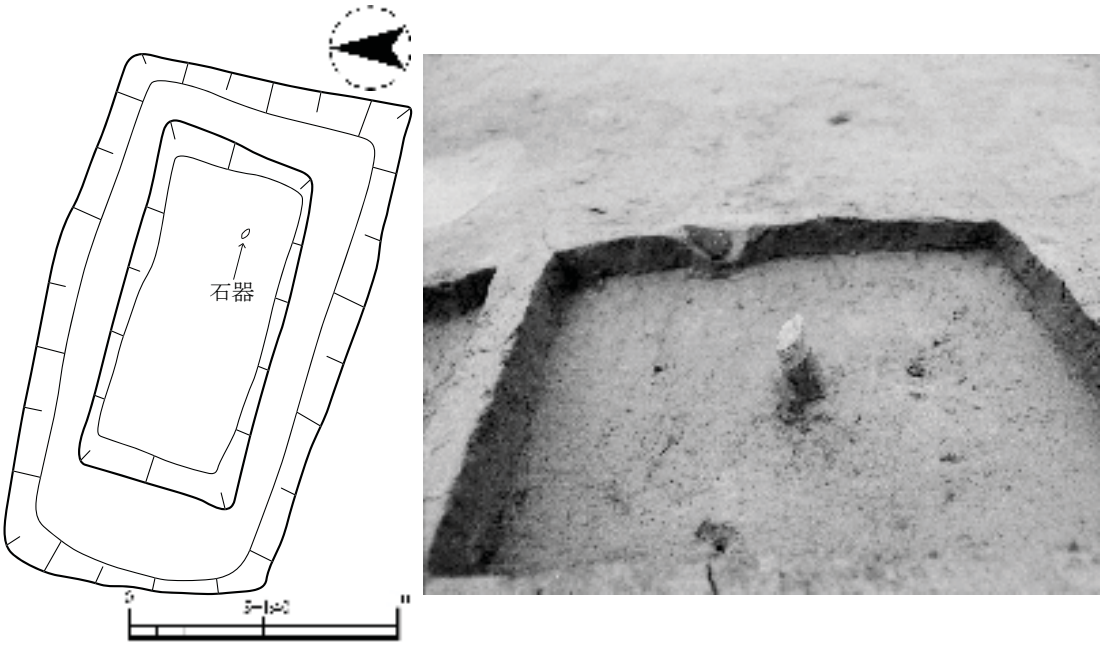


図 21　ＳＺ 405 棺内石鏃出土状況（西から）

－ 22）が出土している。67 は、無頸壺の胴部中位～口縁部にかけての破片である。口縁部は肥厚し、胴部中位から口縁部にかけて多条ヘラ描沈線文が施されている。第Ｉ－４様式に比定できる。22 は、墳丘上面から出土した石核である。全長 42.5㎜、最大幅 62.5㎜、厚さ 14㎜、重量 32 ｇ。この他、剥片が２点出土している。

墳丘内からは、他の遺構から出土した土器と接合する資料が多かったため、ここでは、接合しなかった第Ｉ－４様式に比定できる広口壺を示す（図 22 － 66）。この他、剥片が１点出土している。

北周溝西半はＳＺ 401 南周溝と、南周溝はＳＺ 402 北周溝と、東周溝はＳＺ 403 西周溝と周溝を共有する。周溝北東隅は、ＳＺ 403 北周溝に切られている。周溝内からは、27 リットルコンテナ換算で３箱分の弥生土器が出土しており（図 22－69～74）、今回検出した方形周溝墓の中で最も土器の出土点数が多いものの、器種・部位同定のできない破片も多い。

北周溝からは、頸部～口縁部と胴部下位～底部を欠損した壺形土器（図 22 － 69）と壺形土器底部片３点が出土している。69 は、検出時から口縁部と胴部下半を欠損しており、胴部の破面が周溝の底に接した状態で出土していることから

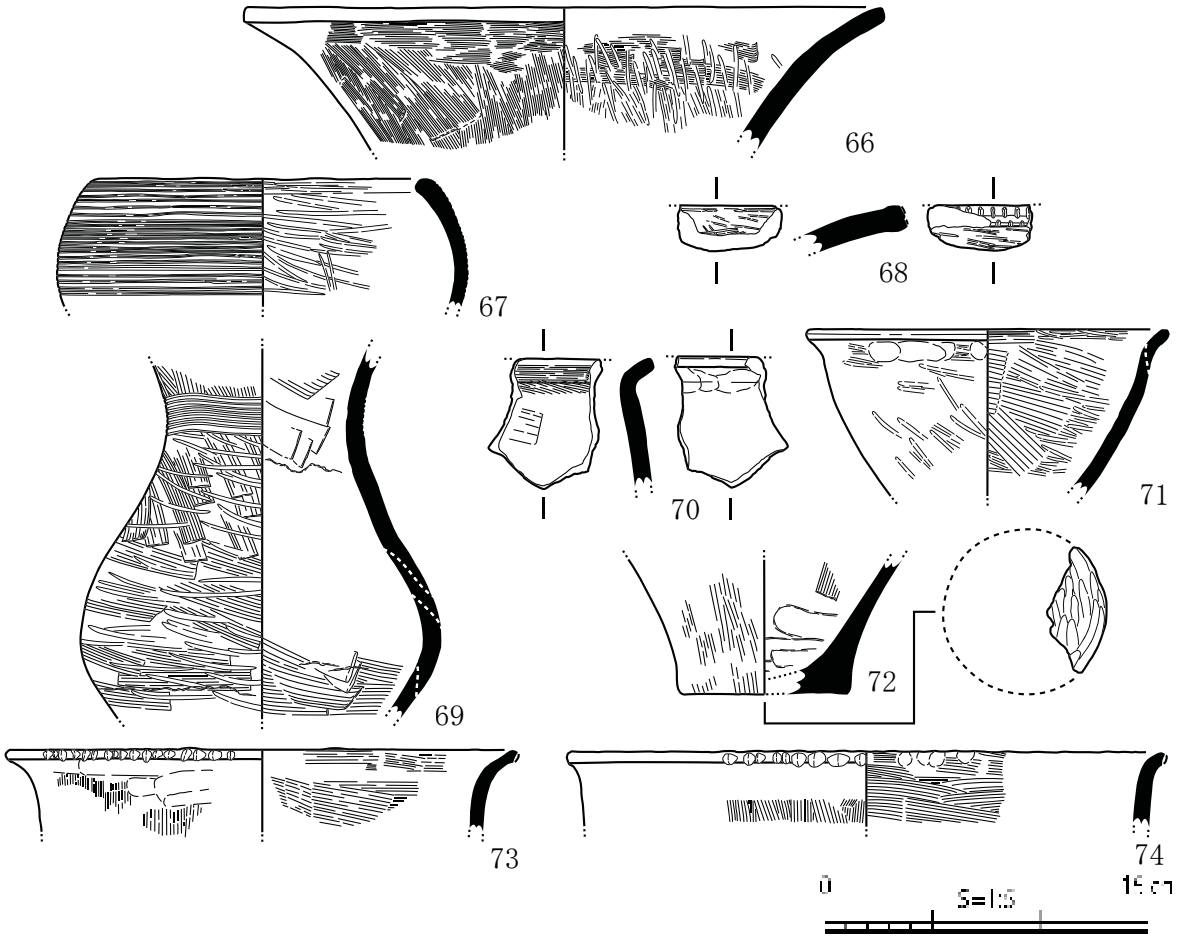


図 22　ＳＺ 405 出土遺物（墳丘内:66、墳丘上面及び墳丘斜面:67･68、北周溝内:69、西・南・東周溝内 70 ～ 74）

(図 23)、いわゆる「打ち欠き土器」にあたる可能性がある。頸部には、断面Ｖ字形の櫛描直線文が施され、胴部上位は張らず、最大径が中位のやや下にある。第Ⅱ－１様式に比定できる。この他、剥片が１点出土している。

西・南・東周溝からは、周溝の底に接した状態で土器が出土している。西・南・東周溝出土の土器は、他の遺構から出土した土器と接合した事例が多い。図 22 － 70 ～ 74 は、他の遺構から出土した土器と接合しなかったものを示している。71 は、無文の鉢形土器であり、外反口縁をもつ。73 は、口縁端部に刻目文が施された甕形土器である。口縁形態は、前期以来の如意形口縁の形を残すが、内面に横ハケ調整を施しており、前期の土器に比べてやや新しい要素をもつ。いずれも、第Ⅱ－１様式に比定できる。石器は、北周溝以外から出土している（図 35 － 23 ～ 26)。23 は、東周溝内から出土した完形の石錐である。全長 40.5㎜で作

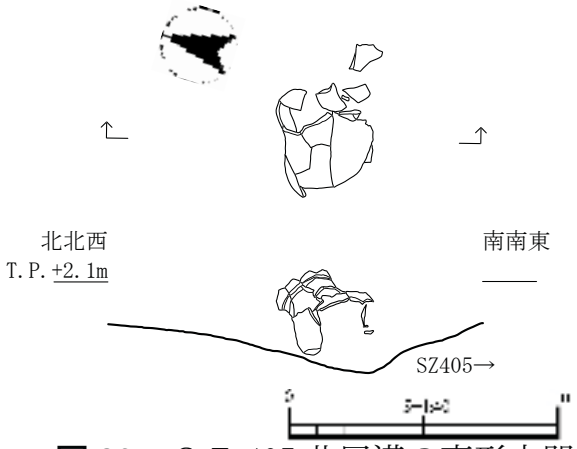


図 23　ＳＺ 405 北周溝の壺形土器（69）出土状況（写真は北から）

用部位の長さは 20.5㎜である。柄部は、最大幅 17㎜、厚さ７㎜。作用部は、最大幅５㎜、厚さ２㎜。重量３ｇ。24 は、西･南周溝から出土した二次剥片である。欠損部にポットリッドが残る。現存長 17㎜、最大幅 26㎜、厚さ 10㎜、重量４ｇ。25 は、西・南周溝から出土した剥片である。形態が楔状となる。全長 27㎜、最大幅 34㎜、厚さ 11㎜、重量８ｇ。26 は、西･南周溝から出土した二次剥片である。側面が欠損している。全長 39㎜、最大幅 58㎜、厚さ 18㎜、重量 33 ｇ。

これらの諸点からＳＺ 405 は、弥生時代前期末～中期初頭に比定できる。

ＳＺ 406　　主体部１基を検出している（図 24）。墓壙規模は、今回調査した中で最も大きい。棺内からは､人骨と石器（所在不明）が出土している。人骨は、頭蓋骨と歯牙、大腿骨、脛骨が遺存していた。東頭位で被葬者は、性別不明で成人の可能性が高い。石器は、棺内埋土中から出土したとの記録が残る。

墳丘上面および墳丘内からの出土遺物はわずかであり、器種・部位同定のできない細片が多い。図 36 － 27 は、墳丘内から出土した完形の凹基式打製石鏃である。刃部と基部の調整を丁寧に行っている。全長 31㎜、最大幅 21㎜、厚さ 3.5㎜、重量２ｇ。

東周溝は、ＮＲ 401 によって削平を受けているため、様相は不明である。

北･西周溝は、隣接するＳＺ 407･408 の周溝と共有していない。周溝の形態は、ＳＺ 403・406 と類似する。北周溝内から遺物は出土していないが、西周溝内からは、弥生土器が出土している（図 25 － 76 ～ 79）。

西周溝出土の弥生土器は、出土点数が少なく、総体的に残存率も低い。西周溝南半から出土した壺形土器（図 25 － 79）は、底部から胴部中位まで全周し、西周溝内出土土器の中で最も残存率が高いことから、図 22 － 69（ＳＺ 405）や図 27 － 85・88（ＳＺ 408）等と同じ性格にあたる可能性がある。79 は、上げ底の壺形土器である。底部面をナデ調整とヘラミガキ調整によって精緻に仕上げている。胴部は、最大径を下位にもち、横に大きく張り出す。外面をヘラミガキ調整で仕上げており、胴部中位から上位にかけてヘラ描沈線文を３帯施す。ヘラ描沈線文は、すべて１条ずつ施文されており、それが６条集まって一つの文様帯を構成している。このヘラ描沈

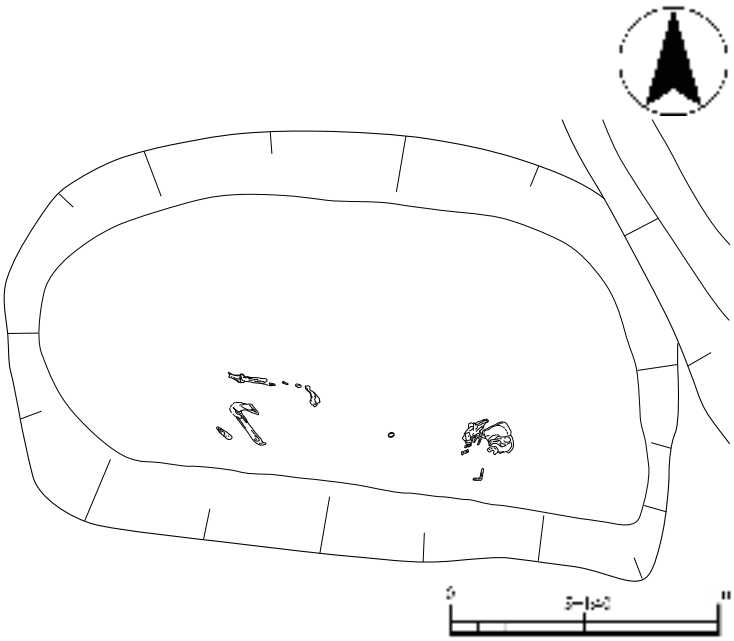


図 24　ＳＺ 406 人骨出土状況

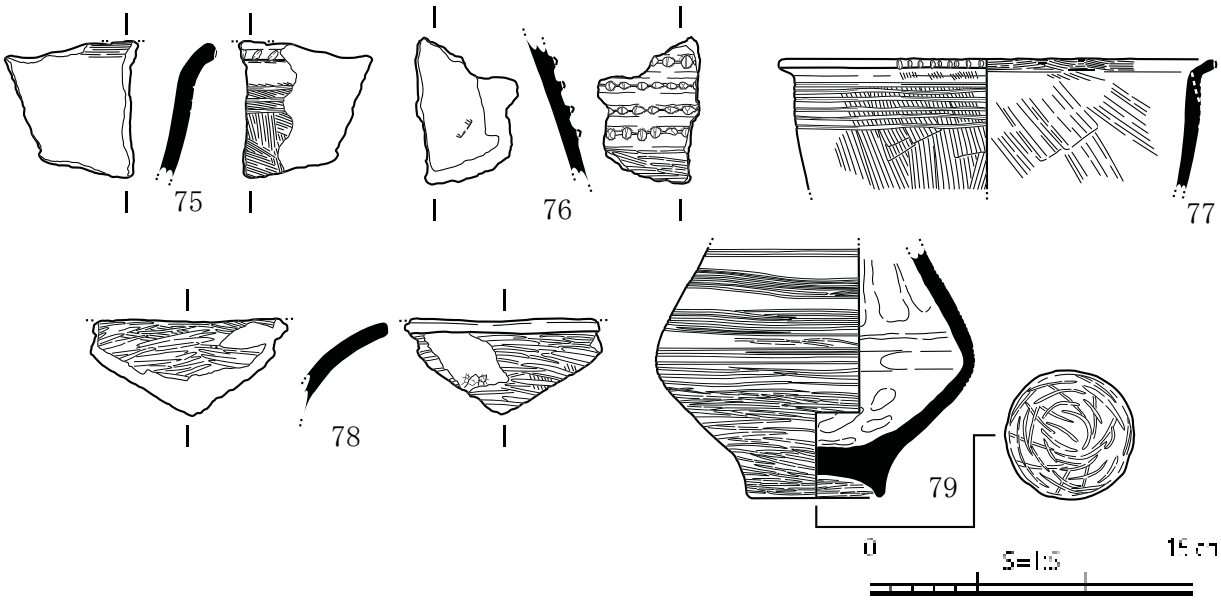


図 25　ＳＺ 406 出土遺物（墳丘内：75、西周溝内：76 ～ 79）

線文には、幾度かの静止痕が認められる。このような文様構成から、ヘラ描沈線文が単数から複数のものへと移行する段階と位置づけられるため、第Ⅱ－1様式に比定できる。

これらの諸点からＳＺ406は、弥生時代前期末～中期初頭に比定できる。

ＳＺ407　調査区中央の南壁際で検出し、遺構の半分以上が未調査区へ拡がる。墳丘北斜面でＳＫ401を検出している。

墳丘は、他の方形周溝墓と同じく平面形態が方形か長方形を呈するとみられ、墳丘主軸は、ＳＺ403・404等と同じ方向になる可能性がある。墳丘上面からは、バイポーラの残る二次剥片が出土している（図36－28）。全長29.5㎜、最大幅50㎜、厚さ7.5㎜、重量11ｇ。

墳丘斜面からは、甕形土器の底部（図26－83）と二次剥片（図36－29）、木製品（所在不明）が出土している。29は、北西斜面から出土した石核で、バイポーラが残る。全長31㎜、最大幅55.5㎜、厚さ16㎜、重量22ｇ。

墳丘内からは、弥生土器（図26－80～83）と石器が出土している。80は、甕形土器の胴部上位～口縁部にかけての破片である。胴部上位にヘラ描沈線文4条が施されている。口縁部は、短く外反する如意状口縁を呈し、内面に横位ハケが施されている。第Ⅰ－4～Ⅱ－1様式に比定できる。石器は、二次剥片が1点出土している。

北周溝はＳＺ403東周溝と接し、西周溝はＳＺ403の南周溝と接している。北・

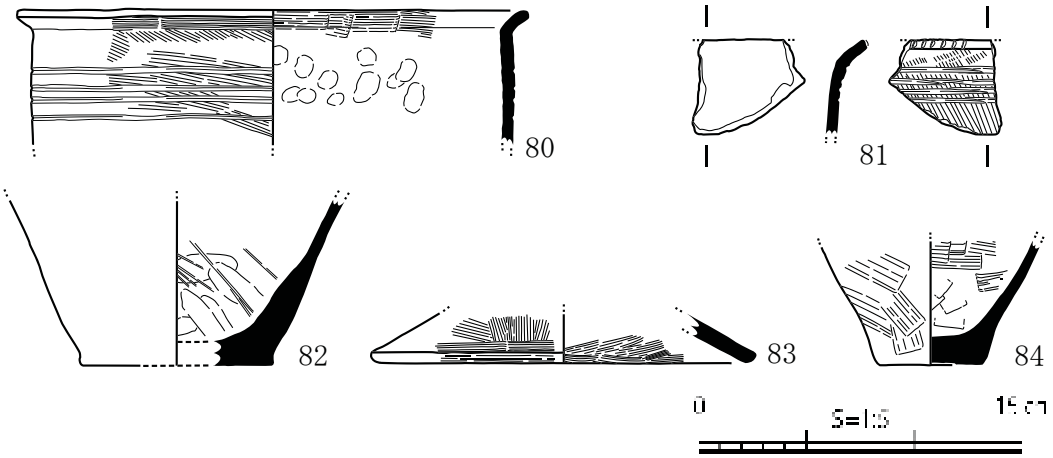


図26　ＳＺ407出土遺物（墳丘内：80～83、墳丘斜面：84）

西周溝は、後出するＳＺ 403 の周溝掘削によって削平を受けているが、北周溝東半は、本来の掘方を留めているとみられる。

これらの諸点からＳＺ 407 は、弥生時代前期末～中期初頭に比定できる。

ＳＺ 408　主体部１基を検出している。棺材と人骨は出土しなかった。墓壙内からは、打製石鏃が３点出土している（図 36 － 30 ～ 32)。30 は、棺床から約 14㎝浮いて出土した円基式打製石鏃である。鋒が折れ、刃部に連続剥離痕が形成

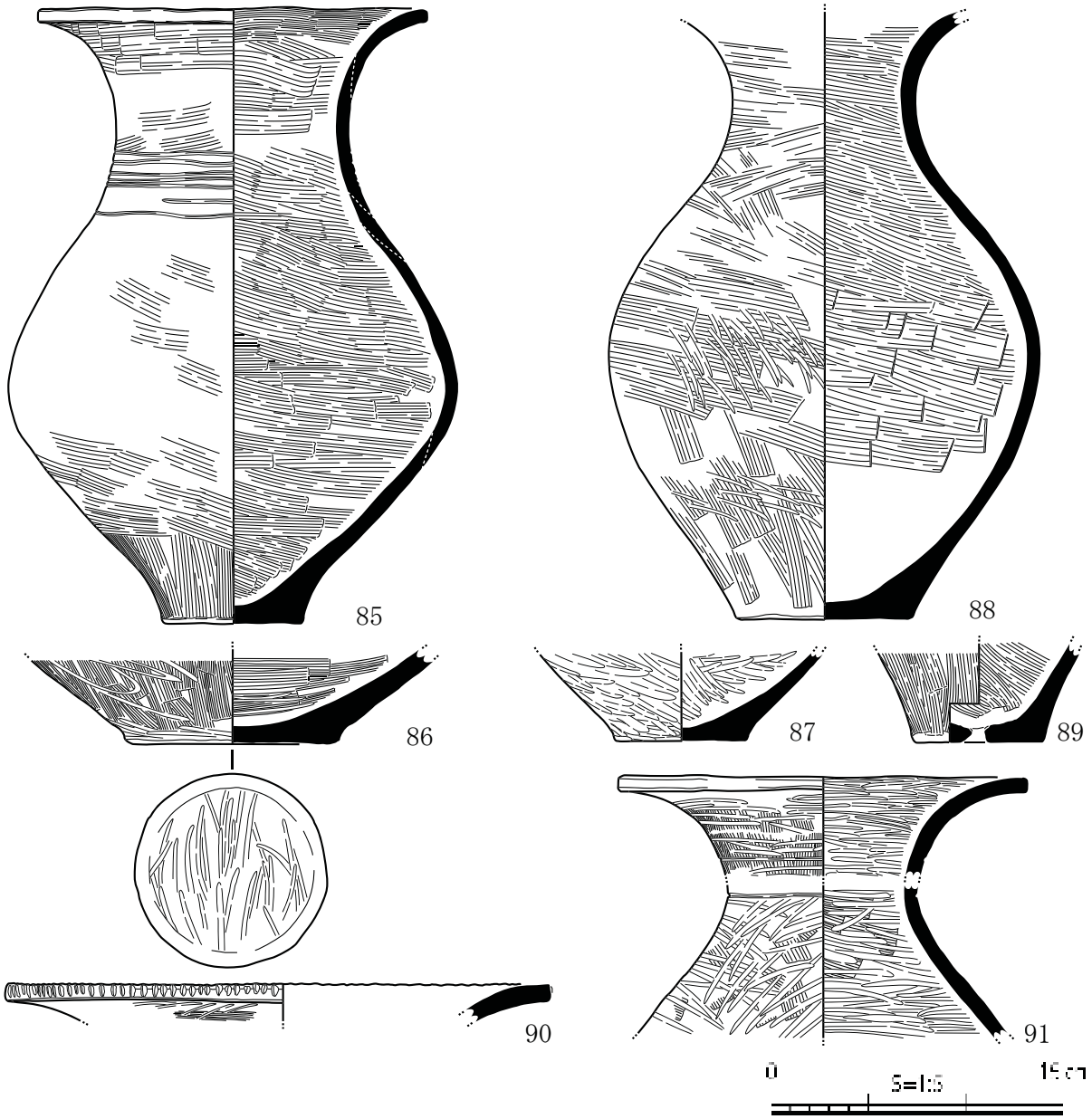


図 27　ＳＺ 408 出土遺物
（南周溝内：85 ～ 87、東周溝内：88、西周溝内：89、墳丘内：90・91）

されている。基部側の欠損は、石鏃の投射実験の成果を援用すると、石鏃を的から引き抜く際に形成された可能性が指摘できる。現存長 24㎜、最大幅 12㎜、厚さ４㎜、重量１ｇ。31 は、棺床から約 15㎝浮いて出土した円基式打製石鏃である。鋒には、折れ面に伴う縦溝状剥離痕が形成されている。現存長 23㎜、最大幅 13㎜、厚さ３㎜、重量１ｇ。32 は、棺床から約７㎝浮いて出土した完形の尖底式打製石鏃である。剥離の単位が当遺跡から出土している他の石鏃よりも大きいのが特徴である。鋒は、わずかに欠損している。全長 36㎜、最大幅 16㎜、厚さ４㎜、重量３ｇ。出土状況から、３点とも棺内にあったものと考えられる。

墳丘上面はＳＤ 403 に切られ、墳丘北西部と北・西周溝の北半はＳＤ 401 に切られている。また、墳丘北側には、人為的な盛土であるＳＸ 402・403 が位置する。墳丘内からは、弥生土器（図 27 － 90・91）と石器（図 36 － 33 ～ 35）が出土している。91 は、壺形土器の胴部上位～口縁部にかけての破片である。内外面ともに、密なヘラミガキ調整によって仕上げられている。頸部は細く締まり、口縁部は大きく外反する。口縁端部は平らな面を持つ。第Ｉ－４様式に比定できる。33 は、有茎式打製石鏃である。鋒が折れている。現存長 32㎜、最大幅 14㎜、厚さ７㎜、重量３ｇ。34 は、凹基式打製石鏃である。東周溝の堀方と接して出土している。鋒は、わずかに欠損している。現存長 41㎜、最大幅 21.5㎜、厚さ６㎜、５ｇ。35 は、剥片である。縦溝状の剥離が観察できる。全長 34㎜、最大幅 14.5㎜、厚さ６㎜、重量３ｇ。

東周溝は、南東隅において周溝が途切れている。これは、周溝掘削時に一部を掘り残すことで形成される陸橋ではなく、周溝底の比高差によって顕現したものであり、南周溝と東周溝は、本来繋がっていたとみられる。

西周溝は、ＳＸ 403 側へ延びる溝が残存しており、人為的な盛土であるＳＸ 403 によって周溝が途切れている。周溝内からは、弥生土器（図 27 － 85 ～ 89）と石器（図 36 － 36）が出土している。

南周溝内からは、完形の壺形土器が出土している（図 27 － 85）。胴部下半を斜にして周溝底と接した状態で出土した（図 28）。外面全体の摩滅が著しく、周溝底に接していた部分を中心に破片が細かくなっている。このような点から本例

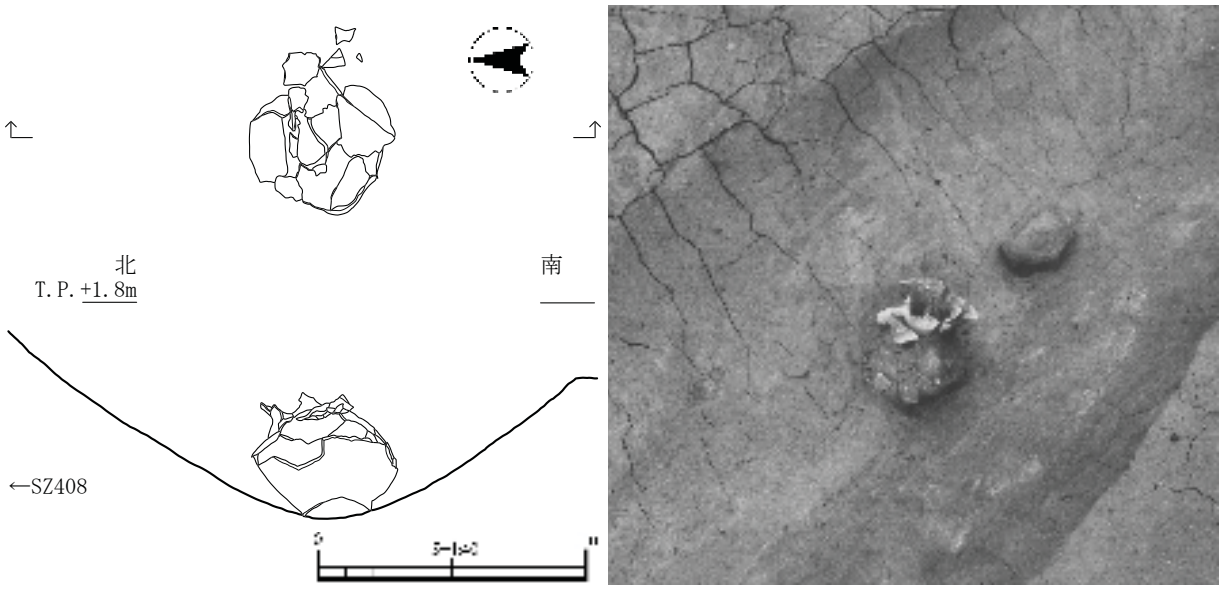


図 28　ＳＺ 408 南周溝の供献土器（85）出土状況（写真は南西から）

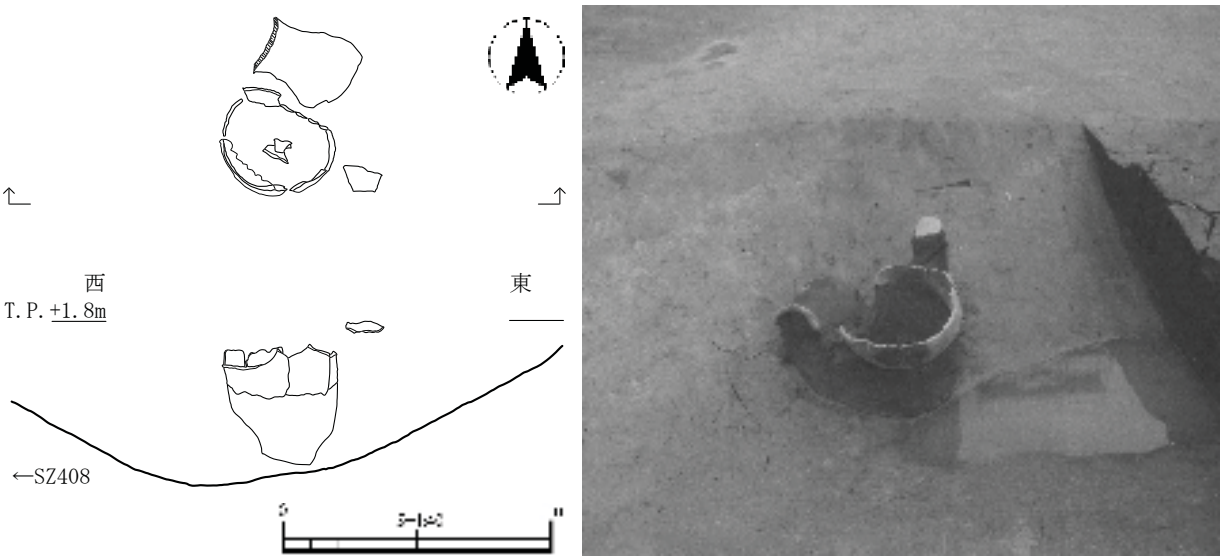


図 29　ＳＺ 408 東周溝の供献土器（88）出土状況（写真は西から）

は、供献時における破砕行為を反映している可能性がある。ただし、周溝の埋没時に土圧で押しつぶされた可能性も残るため、ここでは、二つの可能性があることを提示しておく。胴部は、算盤玉形で中位が横に張る。頸部は、胴部上位からなだらかに続き、やや太い。ヘラ描沈線文７条が施文されているが、下から２条目のヘラ描沈線文のみ全周しない。口縁部は、頸部より緩やかに外反し、口縁端部は平らな面をもつ。第Ⅱ－１様式に比定できる。86・87 の壺形土器の底部片

は、85 と近接した状態で出土している。第Ⅰ－４～第Ⅱ－１様式に比定できる。86 の壺形土器は、東周溝内から出土したもので、墳丘斜面下端で底部を下に向けた状態で直立していた（図 29）。口縁部が欠損しており、打ち欠いている可能性もある。胴部は、中位においてやや横に張る球形を呈し、斜位ヘラミガキによって仕上げられている。第Ⅱ様式に比定できる。89 は、西周溝から出土したもので、胴部下位が残る甕形土器の底部である。周溝底から浮いた状態で出土している。底部面には、焼成後の回転穿孔が施されている。二次被熱による器表面の剥落がみられ、ススが付着している。第Ⅱ様式に比定できる。36 は、二次剥片である。一側縁に剥離痕が連続している。全長 64 ㎜、最大幅 53.5㎜、厚さ８㎜、重量 27 ｇ。

これらの諸点からＳＺ 408 は、弥生時代前

表２　周溝間・遺構間で接合した土器一覧

遺物番号	出土位置	遺物番号	出土位置
図32－96	ＳＺ401南側周溝内	図32－100	ＳＺ403墳丘内
	ＳＺ403墳丘内		ＳＺ403-ＳＺ405間周溝内
	ＳＺ404南側斜面		ＳＺ405墳丘内
	ＳＺ405墳丘上面		ＳＺ405墳丘上面
	ＳＺ408墳丘内		ＳＺ405南東隅周溝内
図32－97	ＳＺ405南西隅周溝内		ＳＺ405東側周溝内
	ＳＺ405墳丘内		ＳＺ405南側斜面
	ＳＺ405墳丘上面	図32－101	ＳＺ401南側周溝内
	ＳＺ402-ＳＺ405間周溝内		ＳＺ405西側周溝内
	ＳＺ403-ＳＺ405間周溝内		ＳＺ405墳丘内
	ＳＺ401-ＳＺ405間周溝内	図32－102	ＳＺ405墳丘上面
	ＳＺ407墳丘内		ＳＺ405墳丘内
	ＳＺ404-ＳＺ407間周溝内		ＳＺ405主体部内
図32－98	ＳＺ402墳丘内		ＳＺ402-ＳＺ405間周溝内
	ＳＺ402墳丘上面	図32－103	ＳＺ401南側周溝内
	ＳＺ405墳丘内		ＳＺ401-ＳＺ404間周溝内
	ＳＺ405南側周溝内	図32－104	ＳＺ404墳丘上面
図32－99	ＳＺ402墳丘内		ＳＺ405墳丘内
	ＳＺ403南側斜面		ＳＺ405墳丘上面
			ＳＺ402-ＳＺ405間周溝内

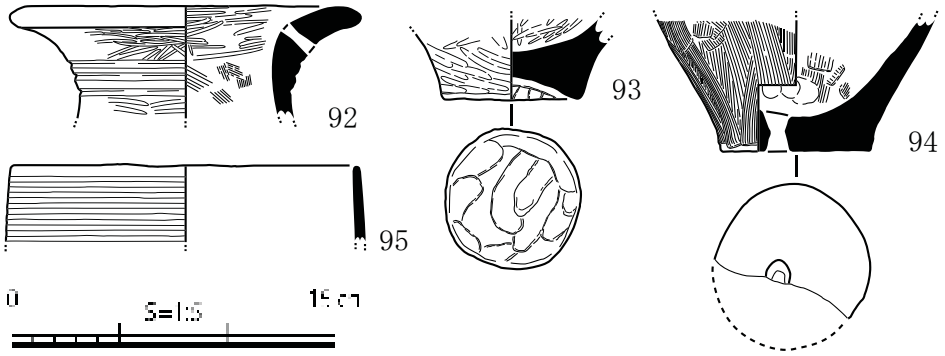


図 30　方形周溝墓周溝間出土遺物
（SZ402・405 間周溝内：92 ～ 94、SZ403・405 間周溝内：95）

期末～中期初頭に比定できる。

E　遺構間で接合した弥生土器

各方形周溝墓の周溝間から出土した遺物（図 30 － 92 ～ 95）と異なる方形周溝墓間から出土した土器が接合した資料（図 32 － 96 ～ 104）を報告する（表２）。

周溝間から出土した土器　92 ～ 94 は、ＳＺ 402・405 周溝間から出土している。92 は、幅広のヘラ描沈線文３条が施された壺形土器の口頸部片である。口縁下端には焼成前に穿孔された紐孔がある。ヘラミガキ調整を主体とする。第Ⅰ－４様式に比定できる。94 は、甕形土器の底部である。底部面に焼成後穿孔がある。図 27 － 88 と同様、回転運動による穿孔と考えられる。95 は、ＳＺ 403・405 周溝間から出土した直口の鉢形土器である。口縁部がやや内湾し、口縁端部は先細である。胴部から口縁部下端にかけて櫛描直線文が施されている。第Ⅱ－１様式に比定できる。

方形周溝墓間で接合した土器　方形周溝墓の木棺内や墳丘上面、周溝内等から出土した土器が他の方形周溝墓から出土した土器と接合している（図 31）。その内訳は、壺形土器５点（図 32 － 96 ～ 99・103）、鉢形土器２点（図 32 － 101・104）、甕形土器２点（図 32 － 100・102）である。96 は、口径 35 ～ 40㎝の広口壺である。第Ⅱ－１様式に比定できる。98 は、胴部上位の張らない小型の壺形土器である。鉢形土器は、101 が深い胴部をもつ直口で、104 が外反口縁をもつ。甕形土器は、100 と 102 には、ヘラ描沈線文と口縁内面に横ハケ調整が

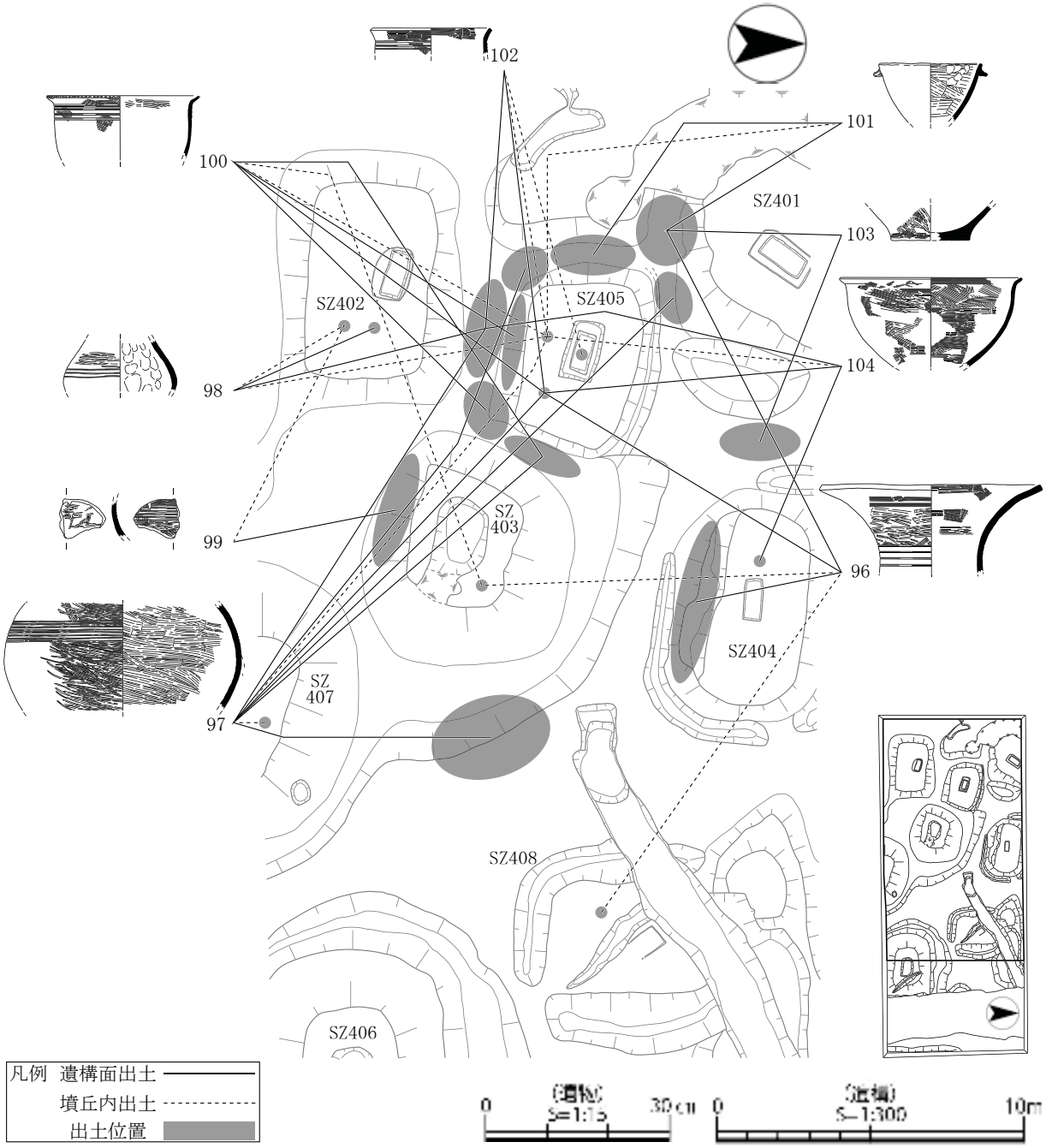


図 31　方形周溝墓間での接合関係

施されている。102 は口縁部の外反が 100 よりも弱く、口縁端部は明瞭な面をもつ。

これらの土器群には、櫛描直線文を施したものがなく、壺形土器がヘラミガキによって仕上げられているものや、甕形土器の口縁部が如意状を呈しているもの等があり、第Ⅰ様式の特徴を具備する資料が多い。また、口径が胴部の深さを上回る鉢形土器や、口縁の内面に横ハケ調整が施されている甕形土器も含まれるこ

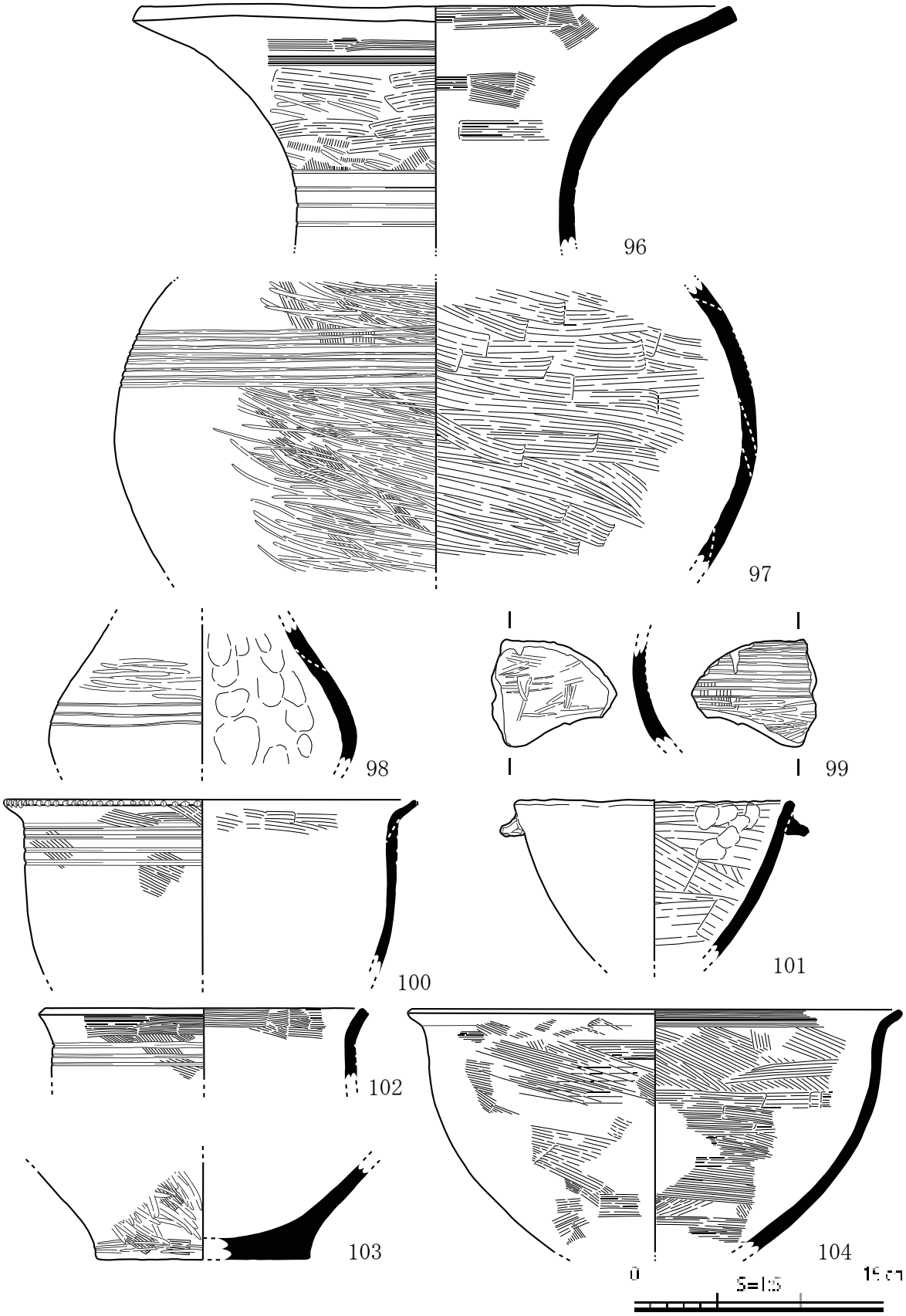


図 32　方形周溝墓間で接合した弥生土器

とから、第Ⅱ様式の特徴をもつ資料も一部存在する。これらの土器は、第Ⅰ－4～第Ⅱ－1様式に比定できるが、時期の異なる土器が同じ周溝内から出土しているのは、墳丘上もしくは墳丘内にあった土器が周溝内へ流れてきたのが要因といえるだろう。

なお、異なる方形周溝墓間から出土した土器が接合した事例は、当遺跡の事例を含めても資料数は多くない。この点については、大阪府文化財センター刊行の『大阪文化財研究』にて論述する予定だが、土器の接合関係をみていくと、分布の中心となっているのは、ＳＺ405であることが判明した。

Ｆ　その他の遺構と遺物

自然流路1条（ＮＲ401）、溝4条（ＳＤ401～404）、土坑1基（ＳＫ401）、性格不明遺構5基（ＳＸ401～405）を検出している。

ＮＲ401は、調査区東で検出した南北溝であり、ＳＺ406、ＳＸ401・402、ＳＤ401を切る。弥生時代後期にあたる遺構で、第4ａ遺構面で検出している自然流路とみられる。埋土はシルトを主体とし、各層に砂礫が混じる。埋土内からは、弥生時代後期を中心とする土器が出土している（図33－105～114）。105は加

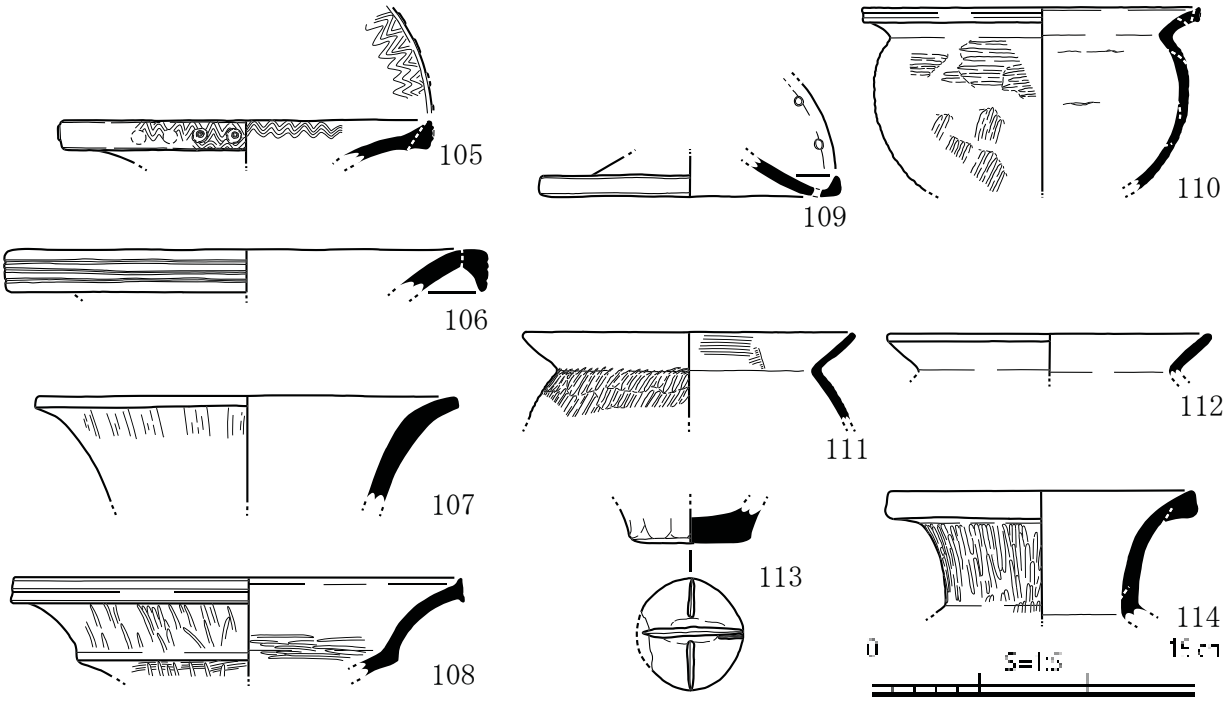


図33　ＮＲ401出土遺物（埋土内：105～113、溝底：114）

飾広口壺、106 は退化凹線文が施された広口壺、107・114 は広口短頸壺、110・111 は右上がりのタタキ調整が施された甕である。108 は、高坏で口縁部を上下に拡張し、口縁端部に強いナデを施して凹部を形成している。この他、剥片 1 点

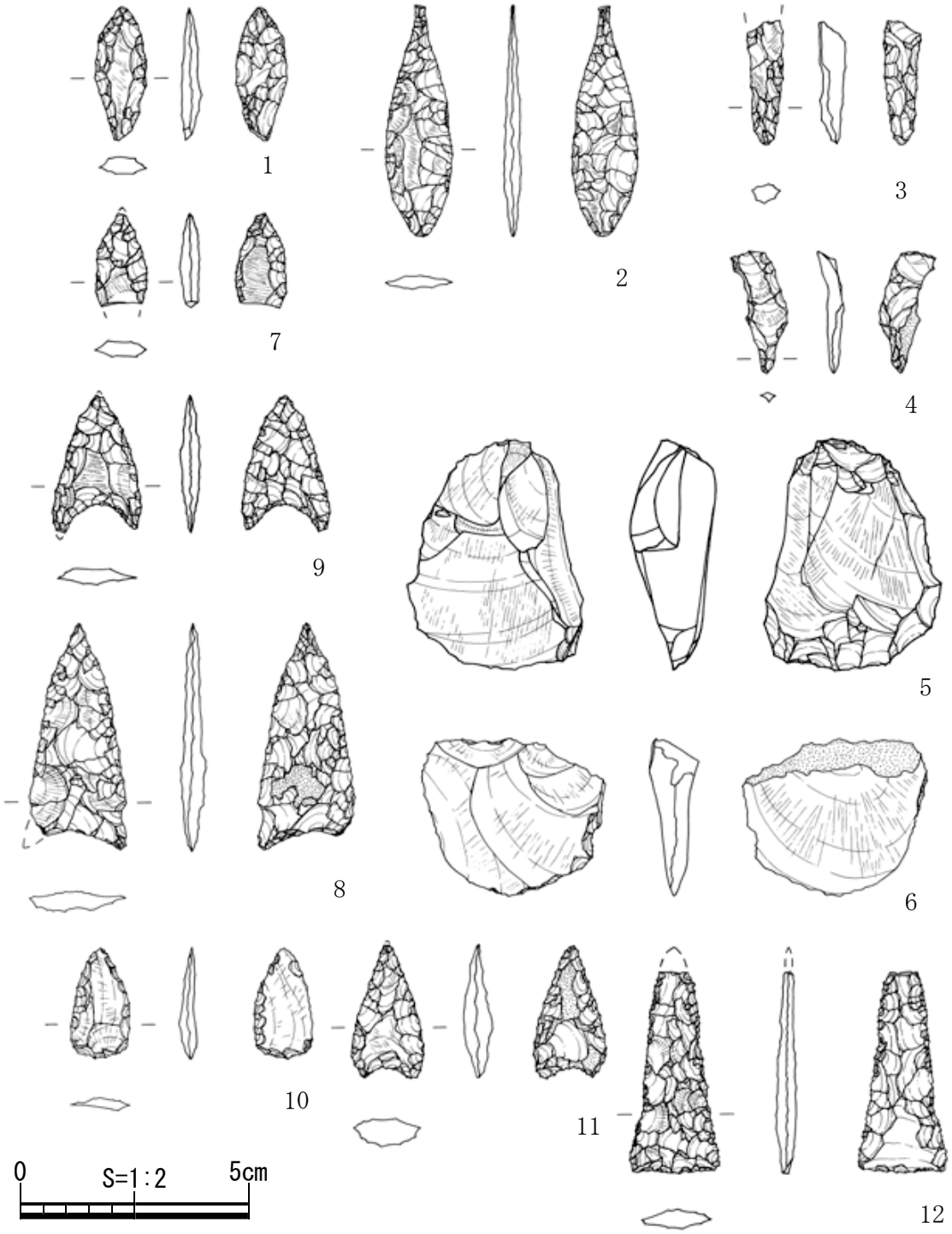


図 34　ＳＺ 401 ～ 403 出土石器（点描は原面、以下同一）

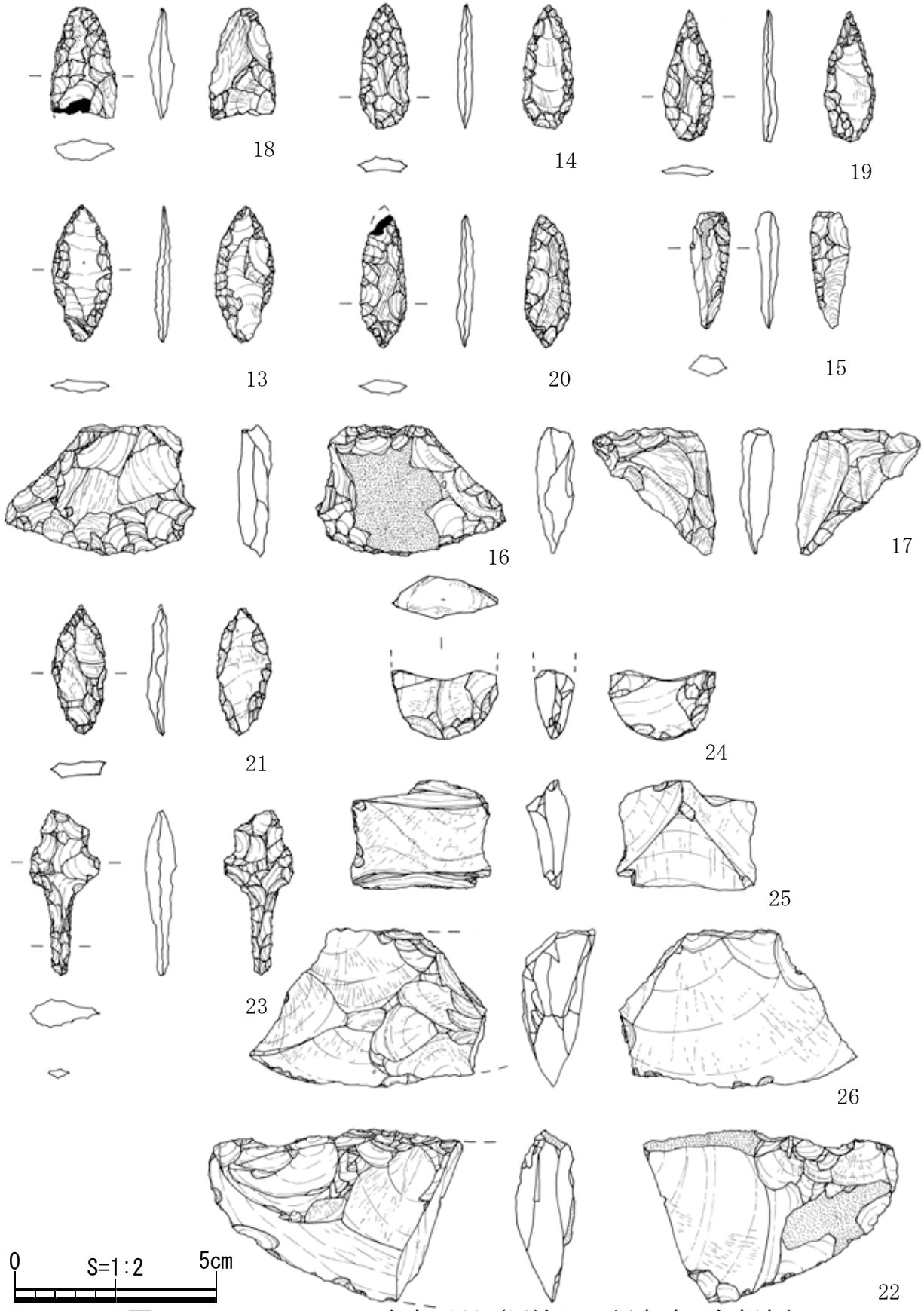


図 35　S Z 404・405 出土石器（黒塗りは調査時の欠損部）

と木製品２点（所在不明）が出土している。

ＳＤ 401 は斜行溝で、ＳＺ 408 とＳＸ 402・403 を切り、ＮＲ 401 に東側が切

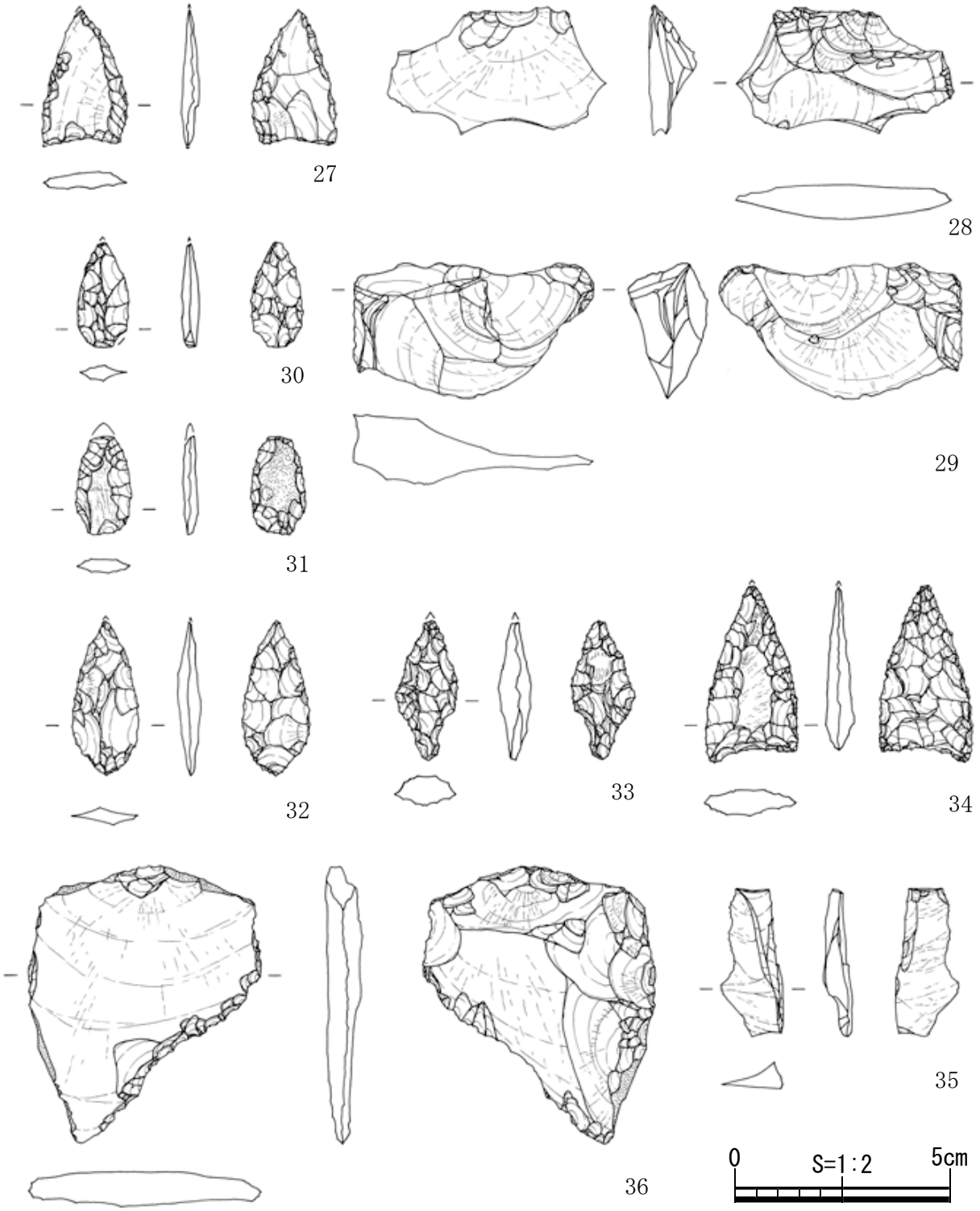


図 36　ＳＺ 406 ～ 408 出土石器

られている。埋土は、暗オリーブ灰色シルト～粘土を主体とし、多くの土層に植物質が混じる。遺物は、弥生土器と打製石鏃（図 37 － 37）が出土している。土器は細片のため、図化に耐えない。37 は、完形の凸基式打製石鏃である。溝の上面から出土している。全長 32㎜、最大幅 12㎜、厚さ 3.5㎜、重量 1 ｇ。

ＳＤ 402 は斜行溝で、ＳＺ 406 墳丘上面で検出している。埋土は、シルトと植物質が混じる暗オリーブ灰色粘土である。ＳＤ 403 は、ＳＤ 402 と一連の斜行溝である可能性がある。いずれの溝からも遺物は出土していない。

ＳＤ 404 は斜行溝で、ＳＸ 404 の西で検出している。遺物は出土していない。

ＳＫ 401 は、ＳＺ 407 北斜面で検出している。平面形は円形で、直径 0.8 ｍ、深さ 0.3 ｍである。遺物は出土していない。

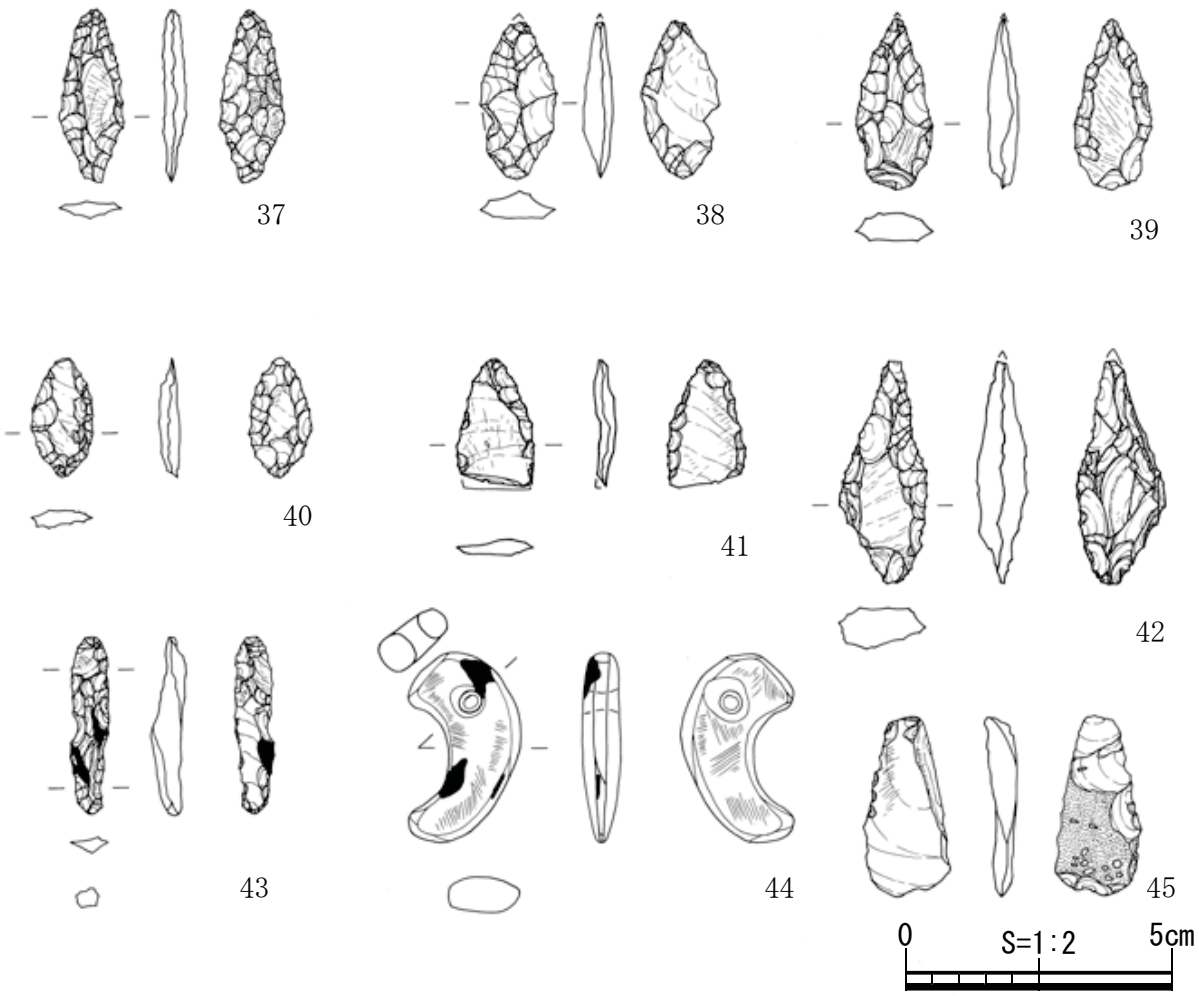


図 37　ＳＸ 402・403・その他遺構出土石器
（43 の黒塗りはマメツ部・44 の黒塗りは欠損部）

ＳＸ 401 は、ＳＺ 406 の北で検出している。ＳＺ 406 北周溝に接し、ＮＲ 401 に大きく削平されている。調査時の記録では、ＮＲ 401 に削平された方形周溝墓の周溝の一部である可能性が挙げられているが、現状では、遺構の性格を再検証するための判断材料が少ない。遺物は出土していない。

ＳＸ 402･403 は、人為的な盛土遺構である。いずれもＳＸ 408 の北側に位置し、盛土の厚さが 20 ～ 30㎝ほどで、水平に盛土が堆積している。ＳＺ 408 に近接しているため、ＳＺ 408 を築造する際に使用した盛土の一部か、新たに方形周溝墓を築造する予定だったのか現状では判断がつかないため、性格不明遺構とした。

ＳＸ 402 からは、打製石鏃が２点出土している（図 37 － 38・39）。38 は、凸基式打製石鏃である。鋒に縦溝状剥離痕とそれに伴う彫器状剥離痕が形成されている。現存長 29㎜、最大幅 15㎜、厚さ５㎜、重量２ｇ。39 は、完形の円基式打製石鏃である。全長 32㎜、最大幅 15㎜、厚さ６㎜、重量２ｇ。

ＳＸ 403 からは、打製石鏃、剥片等が出土している（図 37 － 40 ～ 42）。40 は、墳丘内から出土した完形の凸基式打製石鏃である。全長 22.5㎜、最大幅 11.5㎜、厚さ 3.5㎜、重量１ｇ。41・42 は、ＳＸ 403 の東側から出土した打製石鏃である。41 は、基部が欠損している。現存長 23.5㎜、最大幅 14.5㎜、厚さ３㎜、重量１ｇ。42 は、凸基式打製石鏃である。片側の刃部の調整があまいため、未製品か失敗品とみられる。現存長 41.5㎜、最大幅 16.5㎜、厚さ８㎜、重量５ｇ。この他、ＳＸ 403 東斜面から石器１点、東側から二次剥片３点、剥片 11 点が出土している。

ＳＸ 404 は、ＳＺ 405 の西で検出した自然地形である。遺物は出土していない。

ＳＸ 405 は、調査区東壁際で検出している。遺構の西側をＮＲ 401 に切られている。平面形は、長軸 9.9 ｍ以上、短軸 0.9 ｍ以上である。調査時は、方形周溝墓にあたる可能性が想定されていたが、遺構の大半が調査区外におよぶため、現状では、性格不明遺構とした。遺物は出土していない。

第４ａ遺構面上から石錐（図 37 － 43）と滑石製勾玉（図 37 － 44）、第２遺構面ＳＤ 11 東から香川県金山産のサヌカイト剥片（図 37 － 45）等が出土している。43 は、全体的に摩滅が著しい。全長 33㎜、最大幅７㎜、厚さ４㎜、重量１ｇ。44 は、古墳時代中期のものとみられる。上層からの混入品か。両面穿孔され、表面には

多方向への研磨痕が残る。全長 35㎜、最大幅 14㎜、厚さ７㎜。45 は、金山からの搬入品で、山賀遺跡では過去にも金山産サヌカイトが報告されている（本間・向井編 2007）。全長 33.5㎜、最大幅 16㎜、厚さ６㎜、重量３ｇ。この他、第４ａ遺構面上から剥片３点、他の遺構面上から剥片５点、埴輪溜まり内から剥片１点が出土している。（遺構：相馬・荒田、土器：相馬・山本・荒田、石器：荒田）

５．近大山賀遺跡第５次発掘調査で出土した弥生時代人骨

（１）はじめに

近大山賀遺跡第５次発掘調査において、弥生時代の方形周溝墓から人骨が出土した。出土した人骨は、近畿大学遺跡学術調査団に保管されていた。今回の再整理に伴い、人骨についても整理作業をおこなった。人骨は、発掘調査時に土ごと取り上げられていたため、近畿大学遺跡学術調査団の協力のもと人骨の検出作業と取り上げ作業をおこなった。

近畿地方における弥生時代人骨については、保存状態が良好な資料が少なく、当時の人々の形質が十分に解明されていない。後述するように、近大山賀遺跡第５次発掘調査から出土した人骨も保存状態が良好ではなかったため、その形質を把握することができなかった。しかし、性別や年齢などの人骨の基本的情報を知ることができれば、考古学における墓地分析や、それを通じた社会構造の復元に有効となる。以下、出土人骨の調査成果を報告する。

（２）分析資料と分析方法

分析資料　人骨は、ＳＺ 402・406 から出土している。人骨の資料番号については、人骨が保管されていたケースに記載されたラベル情報を踏襲し、ＳＺ 402 出土の人骨を２号人骨、ＳＺ 406 出土の人骨を９号人骨とした。

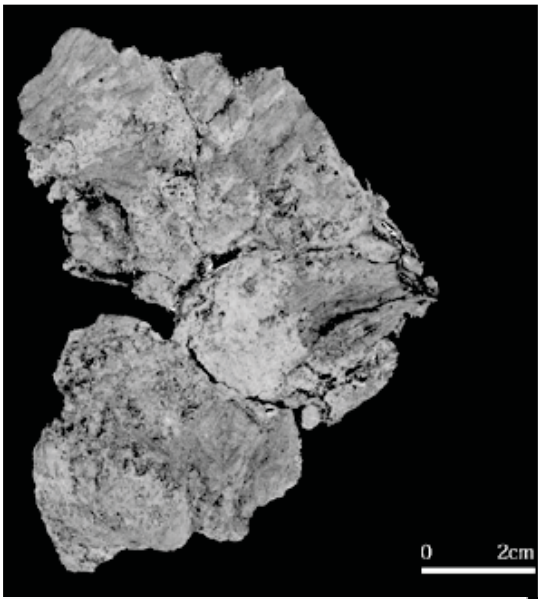
２号人骨が出土したＳＺ 402 は、周溝を含めた大きさが 6.8 ｍ× 9.4 ｍで、墓壙は長軸 181cm、短軸 122cm であった。墓壙の東側から頭蓋が出土していることから、東頭位で埋葬されたと考えられる。墓壙の西側からは長管骨が出土しており、その形状から大腿骨と左右の脛骨と推測でき、膝関節を屈曲させて埋葬されていたと考えられる。それ以外の埋葬姿勢については、人骨の残存状態が悪かっ

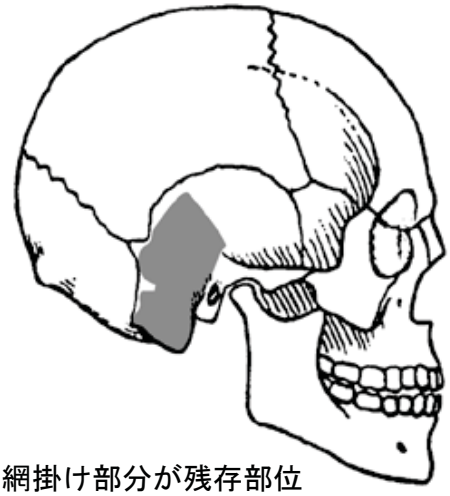
たため、判断することができなかった。

９号人骨が出土したＳＺ 406 は、周溝を含めた大きさが 7.9 m× 9.3 mで、長軸 261cm、短軸 183cm であった。墓壙の東側から頭蓋が出土していることから、東頭位で埋葬されていたと考えられる。

分析方法　性別の判定は、頭蓋の観察に基づいて行った。頭蓋については、乳様突起に注目し、Buikstra and Ubelaker（1994）の基準に従った。

年齢の判定は、歯の咬耗の観察に基づいておこない、栃原博氏（1957）の方法に従った。年齢の表記に関しては、九州大学医学部解剖学第二講座編集『日本民族・文化の生成２』（1988）記載の年齢区分に従い、幼児（1 ～ 6 歳）、小児（7 ～ 12 歳）、若年（13 ～ 19 歳）、成年（20 ～ 39 歳）、熟年（40 ～ 59 歳）、老年（60 歳～）とする。





※網掛け部分が残存部位

図 38　２号人骨頭蓋の残存部位

（３）分析結果

Ａ　２号人骨

人骨の残存部位　頭蓋と四肢骨が残存している。頭蓋は、右側の側頭骨の一部が残存している（図 38）。歯牙は、残存していない。四肢骨は、左右不明の大腿骨の遠位部と左右脛骨の近位が残存している。

性別　頭蓋の右側の側頭骨の乳様突起は、長さが短く、その幅も小さいため、性別は女性と推定した。

年齢　成年以上と推定できるが、年齢を推定できる部位が残存していないため、それ以上の絞り込みはできなかった。

Ｂ　９号人骨

人骨の残存部位　右側の側頭骨の一部

／	／	／	P^2	P^1	C	I^2	／	／	／	／	／	P^2	M^1	M^2	／
／	／	／	P_2	P_1	／	I_2	／	／	／	／	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3

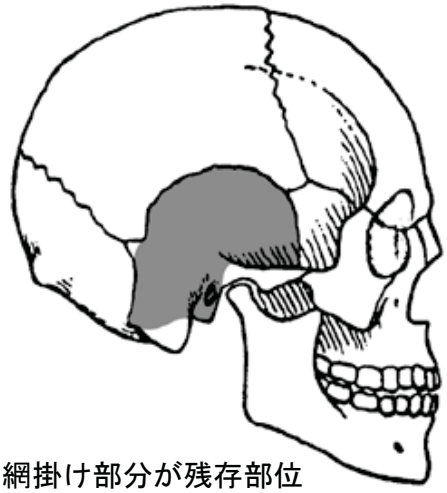
／：欠損・遊離歯

図 39　９号人骨の残存歯牙

と歯牙が残存している。図 39 に残存歯牙を、図 40 に頭蓋の残存部位を示している。

性別　性別は、判定可能な部位が残存していないため、不明である。

年齢　年齢を推定できる部位は、歯牙しか残存していなかった。歯牙の咬耗度は、栃原（1957）分類の１°ｃ～２°ｂであり、成年（20 ～ 39 歳）と推定する。



※網掛け部分が残存部位

図 40　９号人骨頭蓋の残存部位

（４）おわりに

山賀遺跡第５次発掘調査で２基の方形周溝墓から出土した人骨を調査した結果、人骨の形質の詳細は把握できなかったものの、性別や年齢等といった人骨の基本的情報を知ることができた。ＳＺ 402 から出土した人骨（２号人骨）は成年以上の女性、ＳＺ 406 から出土した人骨（９号人骨）は成年と推定できたが、性別は判定することができなかった。（高椋）

６．近大山賀遺跡第５次発掘調査出土木棺材の年輪年代測定

近大山賀遺跡第５次発掘調査出土木棺材２点（ＳＺ 401・図７、ＳＺ 403・図 15）を対象に，年輪年代測定を実施した。２点とも乾燥した状態で近畿大学遺跡学術調査団に保管されていた。当該の木棺材は、光谷拓実氏（奈良文化財研究所）によって図７・15 に示す矢印部分で年輪年代調査が行われており、その際に棺材は切断されていた。今回、改めて年輪年代測定を光谷氏が計測した部位と同じ位置で計測した。年輪幅の計測は、この切断面（木口面）を接写撮影し、Cybis 社製年輪計測ソフト CooRecorder を用いて行った。年輪年代の照合（クロスデーティング）は、年輪曲線をプロットしたグラフの目視評価と、統計評価（Baillie and Pilcher 1973）を併せて行った。

調査対象について、それぞれＳＺ 401・288 層およびＳＺ 403・457 層の年輪幅を計測した。年輪計測画像（図 41）をみると、乾燥により割れが生じている箇所も見受けられるが、放射組織が健全な箇所が計測線に沿って残存しているため、問題なく年輪幅を計測できた。クロスデーティングは、まず調査対象２点間相互について試みたが、照合が成立しなかった。標準年輪曲線群とのクロスデーティ

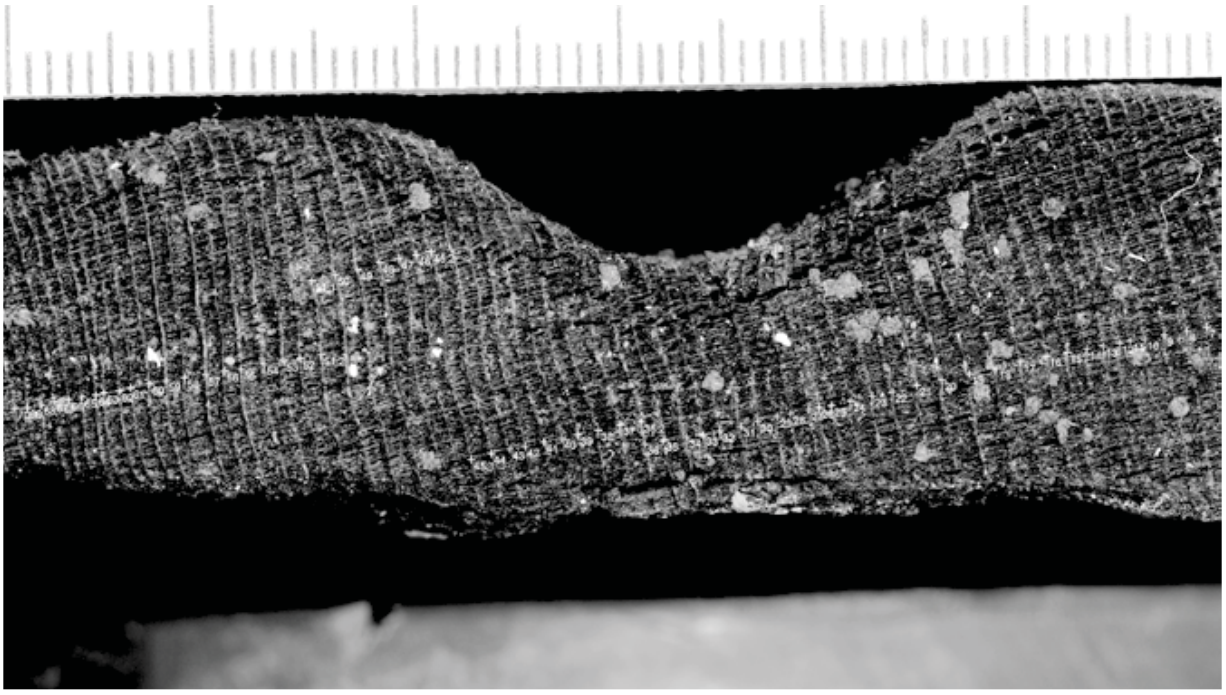


図 41　ＳＺ 403 出土木棺材の年輪計測画像

ングは、ＳＺ 403 についてのみ成立した（註４）。参照したのは、大阪府や兵庫県下の遺跡出土コウヤマキ材で構築された標準年輪曲線（四條畷市史編さん委員会 2016）で、ＳＺ 403 の年輪年代が 825B.C. ～ 369B.C. であることが明らかとなった（ t ＝ 6.9）。ＳＺ 403 出土の木棺材は、最外層の年輪年代（369B.C.）以降に伐採されたこととなる。（星野）

７．考察

これまでの報告結果から、山賀遺跡における方形周溝墓の位置づけをまとめる。なお、遺構・遺物各論については、大阪府文化財センター刊行『大阪文化財研究』に掲載予定のため、そちらを参照して頂きたい。

（１）方形周溝墓の築造時期

これまでの報告から各方形周溝墓の時期的位置づけを検討する。

方形周溝墓の築造時期は、墳丘内から出土した遺物によって比定すると、以下のようになる。

ＳＺ 402 ～ 408　→　ＳＺ 401

次に、周溝間の切り合い関係を検討する。まず、ＳＺ 405 西周溝の幅が本来の周溝幅を保っているとすれば、ＳＺ 401・403 がＳＺ 405 の周溝を削平して築造していることになる。ＳＺ 403 西周溝は、ＳＺ 405 北東隅の周溝を削平しているため、この仮説を裏付けることができる。次に、ＳＺ 407 は、北東隅の周溝が残存しており、この周溝幅でＳＺ 407 を廻っていると仮定すると、ＳＺ 403 がこれを削平していることになる。これらの新旧関係と墳丘内出土遺物の時期をまとめると、築造順が推定できる方形周溝墓は、次のように位置づけられる。

ＳＺ 405
ＳＺ 407　→　ＳＺ 403　→　ＳＺ 401

方形周溝墓の墳丘内から出土している遺物は、第Ⅰ－４様式～第Ⅱ－１様式に比定できる。ＳＺ 402・404・406・408 については、ＳＺ 401 よりも古く位置づけられ、ＳＺ 403 出土木棺材の年輪年代も前４世紀後半に位置づけられることから、今回報告した方形周溝墓は、前期末に築造がはじまり、中期初頭まで築造さ

れた墓域といえるだろう。過去の調査では、中期初頭の方形周溝墓が検出されているが（大阪文化財センター編 1984 等）、今回の再整理によって、山賀遺跡の方形周溝墓は、前期末に遡る可能性があることが判明した。

（２）方形周溝墓の埋没時期

方形周溝墓が機能していた時期は、墳丘上および周溝内から出土した遺物によって比定すると、以下のようになる。

ＳＺ 401・404 ～ 406・408　→　ＳＺ 402・403

ＳＺ 402・403 からは、第Ⅱ－３様式に比定できる鉢（図 11 － 30）と細頸壺（図 16 － 45）が出土している。その他の方形周溝墓からは、第Ⅱ－１様式よりも新しい時期の遺物は出土していない。各方形周溝墓から出土した器種構成表をみると（表３）、ＳＺ 403・406 からは、第Ⅱ－１様式で新たに加わる器種として挙げられている細頸壺（寺沢・森井 1989）が出土している。広口長頸壺と短頸壺も細頸壺とともに登場する新たな要素だが、これらは、ＳＺ 407 を除く方形周溝墓から出土しており、時期も第Ⅱ－１様式に比定することができる。隣接する新上小阪遺跡では、中期後半の方形周溝墓が検出されていることから（伊藤編 2010）、調査地を含むこの地域が弥生時代中期まで墓域として利用され続けていたことがうかがえる。その後、ＮＲ 401 やＳＤ 401 などが方形周溝墓を飲み込んでいることから、少なくとも弥生時代後期前半までには、河川の氾濫等を受けて、これらの方形周溝墓が埋没していったと考えられる。

（３）方形周溝墓の特徴と被葬者像

表４・５は、山賀遺跡で検出された弥生時代前期末～中期前葉の土器棺墓を除く墓を集成したものである。内訳は、方形周溝墓 16 基（今回の報告含む）、木棺墓４基の計 20 基である。

大阪文化財センターが実施した近畿自動車道建設に伴う発掘調査では、８基の方形周溝墓が検出されている。この調査で検出した方形周溝墓の墳丘は、いずれも一辺６～７ｍ前後を測り、方形を指向している。今回報告したＳＺ 403 も方形を指向し、墳丘規模も一辺７ｍ前後であることから、過去の調査事例とも近い。また、方形周溝墓１基につき主体部１基という傾向も今回報告した方形周溝墓と

表３　方形周溝墓出土の器種構成

	壺				鉢	甕	蓋	無文土器か
	広口長頸	広口短頸	細頸	無頸				
ＳＺ401	○				○	○	○	○
ＳＺ402	○				○	○		
ＳＺ403	○		○			○		
ＳＺ404		○				○	○	
ＳＺ405	○			○		○		
ＳＺ406	○		○			○		
ＳＺ407						○	○	
ＳＺ408	○					○		

共通しており、埋葬原理に共通した理念が存在した可能性を示唆する。

大阪文化財センターが調査した山賀遺跡では、木棺の内寸から幼児～小児が埋葬されていたと推定される事例が報告されている。その木棺を安置した墓壙規模は、木棺の規模と関連性がない。つまり、乳児～小児用と推定される木棺であっても、墓壙長軸が３ｍを越えているのに対し、成人用の木棺が墓壙長軸２ｍ以下の墓壙に安置されている事例が存在するのである。このような事例は、時期は下るが巨摩遺跡や下植野南遺跡でも確認されており（藤井 2001）、合理的な説明はいまだについていない。今回報告したＳＺ 401・403 から 150㎝を越える棺材が出土しているものの、いずれも墓壙長軸が２ｍを越える程度であり、改めて、木棺の規模と墓壙規模が揃わない事例が存在することを確認する結果となった。会下和宏氏（会下 2002）によれば、近畿地方中部の墓壙規模は、長軸３ｍ、短軸２ｍ以内に収まる小型墓壙クラスが多いという。また、副葬品をもち、墓壙規模が大型化するのは、中期後葉以降であると指摘している。今回、報告した事例を含め山賀遺跡で検出されている墓壙規模は、会下氏のいう小型墓壙クラスにあたるものである。しかし、ＳＺ 402 からは、赤色顔料が検出され、ＳＺ 402・405

表４　山賀遺跡の弥生墓

発掘調査	遺構	墓の形式	規模（m）（長軸×短軸）	主軸	主体部	木棺材の長さ（cm）			棺内法（cm）		墓壙（cm）		年齢
						底板	側板	蓋板	長軸	短軸	長軸	短軸	
山賀（その２）	第１号方形周溝墓	方形周溝墓	7.6×7.2	南―北	木棺墓１	64～	134	137	135	45	190	102	成人
山賀（その２）	第２号方形周溝墓	方形周溝墓	6×5	南―北	木棺墓１	82	72	91	70	30	104	78	５～６
山賀（その２）	第３号方形周溝墓	方形周溝墓	5.5×4.7	南―北	木棺墓１	-	127	-	106	42～50	232	192	成人
山賀（その３）	４号墓	方形周溝墓	5×4+	西北西―東南東	木棺墓１	57～	54～	-	60～	50	80～	78	12～13
山賀（その３）	５号墓	方形周溝墓	6+×5.5	東―西	木棺墓１	-	105～	85～	100～	45	260	80～	壮年後半
山賀（その３）	６号墓	方形周溝墓	6×6+	西北西―東南東	木棺墓１	-	150/120	100	100	45	218	182	８～10
山賀（その３）	７号墓	木棺墓	-	北東―南西	木棺墓	80	-	138	80	36	350	270	５～６
山賀（その３）	８号墓	木棺墓	-	北東―南西	木棺墓	84	63	82	48	26	110	87	-
山賀（その３）	９号墓	木棺墓	-	北東―南西	木棺墓	120	140	-	135	45	170	100	20～40
山賀（その３）	10号墓	方形周溝墓	-	北北西―南南西	木棺墓１	162	100～	148	130	40	220～	110～	-

＊「+」は現存長
＊「-」のみの欄は不明

等では棺内から打製石鏃や石錐等も出土している。弥生時代に棺内から石鏃が出土した事例は、荒田の集成によれば、全国で200遺跡1800本を越えているが、その性格については、人体に嵌入していた石鏃とそれ以外の石鏃（副葬品・供献品）の違いが一部を除いて明らかになっていないのが実情である。過去の調査では、山賀遺跡９号墓の木棺内から成年男性の人骨とともに肩部と腹部、脚部に張り付いた状態で打製石鏃が出土している（大阪文化財センター編 1984）。また、巨摩遺跡（堀江

編 1981）や若江北遺跡（大阪文化財センター編 1995）、瓜生堂遺跡（大阪文化財センター編 1982）、久宝寺遺跡（中西編 1986）からも棺内から打製石鏃が出土している。方形周溝墓から石器が出土した事例は、各地で報告されている。駄坂・舟隠遺跡や細口源田山遺跡、東武庫遺跡、山中遺跡などがその事例であり、前期～中期前半の方形周溝墓に類例が認められる。瀬戸谷哲氏（瀬戸谷編 1989）は、駄坂・舟隠遺跡９号墓下層

表５　山賀遺跡の弥生墓

発掘調査	遺構	墓の形式	規模（m）（長軸×短軸）	主軸	主体部	木棺材の長さ（cm）			棺内法（cm）		墓壙（cm）		年齢
						底板	側板	蓋板	長軸	短軸	長軸	短軸	
山賀（その５・６）	第１号周溝墓	方形周溝墓（円形周溝墓?）	6.8+×4.2+	西北西―東南東	木棺墓１	–	70	–	50	25	168	164	–
山賀遺跡Ⅱ	11木棺墓	木棺墓	–	東―西	木棺墓	–	34～	–	50～	38	85～	69～	–
近大山賀遺跡第５次	ＳＺ401	方形周溝墓	6.6+×6.4	北東―南西	木棺墓１	–	153	–	–	–	204	118	–
近大山賀遺跡第５次	ＳＺ402	方形周溝墓	9.4×6.8	東―西	木棺墓１ 土器棺１	–	–	–	–	–	181	122	成人
近大山賀遺跡第５次	ＳＺ403	方形周溝墓	7.8×7.1	西北西―東南東	木棺墓１	–	–	164	–	–	263	177	–
近大山賀遺跡第５次	ＳＺ404	方形周溝墓	7.9×5.7+	東―西	木棺墓１	–	–	–	–	–	140	63	–
近大山賀遺跡第５次	ＳＺ405	方形周溝墓	6.4×4.9	西北西―東南東	木棺墓１	–	–	–	–	–	202	117	–
近大山賀遺跡第５次	ＳＺ406	方形周溝墓	9.3+×7.9+	東―西	木棺墓１	–	–	–	–	–	261	183	成人
近大山賀遺跡第５次	ＳＺ407	方形周溝墓	9.2+×4.0+	–	木棺墓１	–	–	–	–	–	–	–	–
近大山賀遺跡第５次	ＳＺ408	方形周溝墓	6.5+×5.7	北―南	木棺墓１	–	–	–	–	–	99～	74～	–

＊「+」は現存長
＊「–」のみの欄は不明

埋葬主体内から出土した打製石鏃について、全体的にばらまかれた状態で出土し、石鏃の中には、２～３個に割れているものがあったと報告した上で、意図的に石鏃を折損して供献した可能性を挙げている。瀬戸谷氏の仮説を立証するには、棺内から出土した石鏃の出土状況とその立面図、そして、意図的に折損された破損状況を観察していく必要がある。また、周溝内や墳丘上等から供献土器とともに石器が出土する意味も検討の余地が残されている。今回報告した棺内出土の打製石鏃は、鋒にわずかな折損があり、出土位置も被葬者の埋葬されていた範囲内から出土していることから、これらは、人体に嵌入していた可能性が第一に考えられる（荒田 2013）。ただし、周溝内や墳丘上等から供献土器とともに石器が出土していることを踏まえると、供献行為に伴って石器が使用された可能性も考慮する必要がある。

方形周溝墓という手間のかかる造墓作業を行い、そこへ殺傷された人間を埋葬するという丁寧な扱いを受け、さらに赤色顔料の塗布された主体部の存在や、１つの方形周溝墓に１つの主体部という要素を勘案すると、前期末～中期初頭の近畿地方でも格差が生じはじめていたことがうかがえるのである。

（４）造墓集団について

山賀遺跡が盛期を迎えるのは、弥生時代前期前半と中期中葉であり、今回報告した方形周溝墓と集落の盛期は時期的に合致しない。前期末～中期初頭の集落が近隣で営まれているのは、山賀遺跡の南方約１㎞に位置する美園遺跡である。多数の遺物のほか、建て替えられた竪穴建物が複数棟検出されており、一定期間定住していた様子がうかがえる（渡辺編 1985）。このような状況から秋山浩三氏は、「前期後半段階では、山賀遺跡はさらに内陸部へ南進して美園遺跡を形成し」たと指摘している（秋山 2007・p95）。

井藤暁子氏（井藤 1985）は、美園遺跡Ｂ地区の前期後半～中期初頭の土器群を分析した結果、「全体量に対する第Ⅱ様式土器の割合は２％」という数値を提示している。また、遺物の様相としては、前期的様相を保ちながらも確実に第Ⅱ様式の土器群へ続く様相が認められることも指摘している。そして、当調査地の方形周溝墓から出土した土器には、初期の櫛描文をもつ図 22 － 69 や、櫛直文を

指向するが実際はヘラ描沈線文によって行う図 27 － 85 等が出土している。これらを美園遺跡出土の土器群と比較すると、土器の形態や文様等が非常に類似しているといえる。つまり、今回検出した方形周溝墓は、前期末～中期前葉の所産であることが改めて確認することができ、その造墓集団の候補として、美園遺跡が挙げられるのである。

山賀遺跡は、前期前半まで集落が継続したものの、前期後半以降には、衰退を迎える。前期末～中期初頭には、墓域として利用されるようになり、新上小阪遺跡を含め中期後半に至るまで継続する。亀井聡氏が山賀遺跡の変遷をまとめているように（亀井編 2009)、この地に営まれた方形周溝墓は、河川の間に立地する傾向があり、方形周溝墓の造墓に共通した工程が存在することも明らかとなった。今回報告した方形周溝墓群と大阪文化財センターが調査した中期初頭の方形周溝墓群は、上述した理由から同じ墓域として利用されていたと考えられる。では、なぜあえて不安定な場所を選んで造墓しているのか。この点については、今後の課題としたい。（相馬・荒田）

８．おわりに

近大山賀遺跡第５次調査において８基の方形周溝墓を発見していたことは、これまで本誌上や本学文芸学部文化・歴史学科と東大阪市教育委員会発行の「東大阪市と中河内の文化資源」のパンフレット等で簡単に紹介してきた。このたび、これら方形周溝墓群の遺構･遺物の再整理を継続して行い、発掘調査の詳細なデータを提示するとともに、造墓の開始時期が弥生時代前期末に遡る可能性が高く、河内地域でも非常に古い段階に遡る方形周溝墓群であることを明らかにできたのは大きな成果であった。また、方形周溝墓群は弥生時代中期初頭まで営まれているが、この時期は山賀遺跡の集落形成の盛期とは合致せず、造墓集団の集落域との関係についても改めて問題を提起できたといえる。

ただ、近大山賀遺跡第５次調査では弥生時代の遺構だけでなく、上層において円筒埴輪や形象埴輪が出土した古墳時代の遺構、古代の掘立柱建物群も検出している。これらの遺構は附属高校敷地内で発見されている近大山賀古墳や、大型井

戸とともに多くの墨書土器や石帯などが出土した小若江遺跡との関連が想定できる遺構である。今後の課題として、古墳時代あるいは古代の遺構の整理も継続して進め、近畿大学構内遺跡全体の歴史的変遷を明らかにする必要がある。

なお、今回報告した遺構・遺物は、新たに台帳を作成し、ファイリングした実測図面類とともに近畿大学遺跡学術調査団において保管している。（網）

跋文

今回報告した東大阪市近大山賀遺跡第５発掘調査第４ｂ遺構面の整理作業は、近畿大学文芸学部４回生・相馬勇介（現・堺市文化観光局文化部文化財課学芸員）が中心となって行い、同学部４回生・矢野昌史（現・近畿大学大学院生）と清水麻里奈（現・名古屋大学大学院生）、京都橘大学文学部３回生・中谷俊哉（当時）がこれに参加した。また、遺構図面・遺物整理等、本稿作成に関する助言、指導を近畿大学民俗学研究所・藤田義成氏、神戸市教育委員会・荒田敬介氏、国立文化財機構奈良文化財研究所・光谷拓実氏、星野安治氏、山本　亮氏（現・東京国立博物館）、下関市立土井ヶ浜遺跡人類学ミュージアム・高椋浩史氏から頂いた。遺構写真・遺跡全景写真は藤田氏が撮影し、遺物写真は、国立文化財機構奈良文化財研究所・中村一郎氏、飯田ゆりあ氏に撮影指導していただいた。本稿の編集は、近畿大学文芸学部教授・網伸也監修のもと、相馬・荒田が行った。

本稿をまとめるにあたり、下記の個人と団体から御高配を賜った。ご芳名に代えて深謝申し上げる（50 音順・敬称略）。

秋山浩三・朝井琢也・阿部敬生・池田　毅・伊藤淳史・川部浩司・桐井理揮・柴田将幹・菅栄太郎・張　祐榮・土屋みずほ・西村公助・濱田延充・濱野俊一・樋口　薫・廣瀬時習・福島孝行・福永信雄・藤井　整・三好孝一・森岡秀人・森川　実・近畿弥生の会。

註記

（１）第４遺構面を二つに分けた理由は次による。第Ⅵ～Ⅷ層は、自然流路などの洪水堆積層であり、この土層を除去した際に方形周溝墓の上面を検出した。発

掘時は、第Ⅵ～Ⅸ層が第４遺構面と認識していた。今回の再整理によって、第Ⅵ～Ⅷ層と第Ⅸ層には時期差が認められること、双方の土層上で遺構を検出していることから、本報告では弥生時代の遺構面を二つに分けた次第である。

（２）遺構略称は、文化庁文化財部記念物課（監修）2010『発掘調査のてびき』同成社に基づく。また、方形周溝墓の各部名称、計測方法は、京都府下植野南遺跡の発掘調査事例（藤井 2004）を参照した。

（３）本例は、方形周溝墓築造以後の供献行為である「追善儀礼」（大庭 2001）や墓域を一定期間管理していた可能性にあたるものと位置づけられる。周溝の再掘削という行為も左記の点にあたる可能性がある（岩松 2004）。

（４）標準年輪曲線とのクロスデーティングは、奈良文化財研究所客員研究員の光谷拓実氏の協力を得た。

【引用・参考文献】

秋山浩三 2004「初期農耕集落としての瓜生堂遺跡」『瓜生堂遺跡１』 大阪府文化財センター調査報告書第 106 集　大阪府文化財センター　pp.465-482

秋山浩三 2007『弥生大形農耕集落の研究』 青木書店　pp.272-307

後川恵太郎 2009「方形周溝墓の墳丘構築法について」『方形周溝墓の埋葬原理』史跡王山古墳群環境整備工事完成記念考古学研究フォーラム記録集　鯖江市教育委員会　pp.11-20

荒田敬介 2013「弥生墓出土鏃の性格推定法」『奈良文化財研究所紀要 2013』 奈良文化財研究所　pp.54-55

生田維道（編）1983『山賀（その４）』 大阪文化財センター

市村慎太郎（編）2003『東大阪市所在新上小阪遺跡』大阪府文化財センター調査報告書第 94 集　大阪府文化財センター

井藤暁子 1985「美園遺跡出土の弥生時代前期後半～中期初頭の土器について」『美園』 大阪文化財センター　pp.464-492

伊藤　武（編）2010『新上小阪遺跡Ⅲ』大阪府文化財センター調査報告書第 209 集　大阪府文化財センター

今村道雄・奥田尚・井村万亀男・多賀谷昭・安部みき子・沢田正明・秋山隆保・嶋倉巳三郎・中野武登・安田喜憲・田代克己 1981『瓜生堂遺跡Ⅲ』 瓜生堂遺跡調査会
岩松　保 2004「市田斉当坊遺跡の方形周溝墓－特に周溝を掘り直す行為；京都府内の事例を含めて－」『市田斉当坊遺跡』京都府遺跡調査報告書第 36 冊　京都府埋蔵文化財調査研究センター　pp.184-198
会下和宏 2002「弥生墳墓の墓壙規模について―西日本～関東地域の木棺・木槨墓等を中心に―」『島根考古学会誌』第 19 集　島根考古学会　pp.33-63
大阪文化財センター（編・刊行）1982『巨摩・瓜生堂』
大阪文化財センター（編・刊行）1983『山賀（その２）』
大阪文化財センター（編・刊行）1984『山賀（その３）』
大阪文化財センター（編･刊行）1995『巨磨･若江北遺跡発掘調査報告－第 4 次－』
大庭重信 1999「方形周溝墓制からみた畿内弥生時代中期の階層構造」『国家形成期の考古学』 大阪大学考古学研究室・大阪大学考古学友の会　pp.169-184
大庭重信 2001「加美遺跡方形周溝墓の葬送過程の復元」『大阪市文化財協会研究紀要』第 4 号　大阪市文化財協会　pp.27-38
亀井　聡（編）2009『山賀遺跡Ⅱ』大阪府文化財センター調査報告書第 194 集　大阪府文化財センター
趙　哲済 1999「大阪市加美遺跡､弥生時代中期Ｙ１号墳丘墓の築造過程について」『大阪市文化財協会研究紀要』第２号　大阪市文化財協会　pp.269-288
九州大学医学部解剖学第二講座（編）1988「九州大学医学部解剖学第二講座所蔵古人骨資料集成」『日本民族・文化の生成』２　六興出版
近畿大学文芸学部文化・歴史学科・東大阪市教育委員会（編・刊行）2017「古代の小若江と旧長瀬川流域ー近畿大学周辺の歴史と文化ー」『東大阪市と中河内の文化資源３』
近畿弥生の会（編）2007『墓制から弥生社会を考える』考古学リーダー 10　六一書房
四條畷市史編さん委員会（編）2016『四條畷市史』第五巻（考古編） 四條畷市

島崎久恵（編）2007『新上小阪遺跡Ⅱ』大阪府文化財センター調査報告書第 166 集　大阪府文化財センター

杉本厚典 2001「河内における弥生時代中期末～古墳時代初頭にかけての土器の型式編年と様式」『大阪市文化財協会研究紀要』第 4 号　大阪市文化財協会 pp.39-86

杉本二郎（編）1983『山賀（その１）』 大阪文化財センター

瀬戸谷皓（編）1989『駄坂・舟隠遺跡群』豊岡市文化財調査報告書 22・豊岡市郷土資料館報告書 22　豊岡市教育委員会

田中和弘・岸本道昭（編）1986『山賀（その５・６）』 大阪文化財センター

田中清美（編）2015『大阪市平野区加美遺跡発掘調査報告Ｖ』 大阪市博物館協会・大阪文化財研究所

都出比呂志 1989『日本農耕社会の成立過程』 岩波書店

坪井清足 1956『岡山県笠岡市高島遺蹟調査報告』岡山県笠岡市高島遺蹟調査委員会

寺沢　薫・森井貞雄 1989「河内地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ　木耳社　pp.41-146

土肥富士夫（編）1982『細口源田山遺跡』 七尾市教育委員会

栃原　博 1957「日本人歯牙の咬耗に関する研究」『熊本医学会雑誌』31　熊本医学会　pp.607-656

萩田昭次・桑原正明 1963『布施市高井田遺跡』 布施市教育委員会

馬場慎一郎 2004「大阪府亀井遺跡から出土した鋸歯縁加工のある石器の低倍率分析」『若江北・亀井・長原（城山）遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告 2003 －３　大阪府教育委員会　pp.47-52

堀江門也（編）1981『巨摩・瓜生堂』 大阪文化財センター

中西克広（編）1986『久宝寺遺跡発掘調査報告 - 久宝寺緑地公園内雨水貯留池築造工事に伴う発掘調査－』 東大阪市文化財協会

中村大介 2004「方形周溝墓の成立と東アジアの墓制」『朝鮮古代研究』第５号　朝鮮古代研究刊行会　pp.27-50

服部信博（編）1992『山中遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 40 集　愛知県埋蔵文化財センター
深澤芳樹 1996「墓に土器を供えるという行為について（上）（下）」『京都府埋蔵文化財情報』第 61・62 号　京都府埋蔵文化財調査研究センター　pp.1-16・1-7
福佐美智子（編）2013『久宝寺遺跡２』大阪府文化財センター調査報告書第 239 集　大阪府文化財センター
藤井　整 2001「方形周溝墓の成立」『京都府埋蔵文化財情報』第 82 号　京都府埋蔵文化財調査研究センター　pp.31-40
藤井　整 2004「方形周溝墓の名称と計測値について」『下植野南遺跡Ⅱ』京都府遺跡調査報告書第 35 冊　京都府埋蔵文化財調査研究センター　pp.19-20
藤井　整 2009「方形周溝墓調査の課題と方法」『みずほ』第 41 号　大和弥生文化の会　pp.37-58
藤田義成 2014「近畿大学構内遺跡学術調査の紹介（一）」『民俗文化』第 26 号　近畿大学民俗学研究所　pp339-342
藤田義成 2015「近畿大学構内遺跡学術調査の紹介（二）」『民俗文化』第 27 号　近畿大学民俗学研究所　pp315-319
藤田義成 2016「近畿大学構内遺跡学術調査の紹介（三）」『民俗文化』第 28 号　近畿大学民俗学研究所　pp327-328
本間元樹・向井　妙（編）2007『山賀遺跡』大阪府文化財センター調査報告書第 163 集　大阪府文化財センター
三好孝一 1996「巨摩遺跡中期方形周溝墓出土土器覚書－ 11 号墓出土供献土器をめぐって－」『大阪文化財研究』第 10 号　大阪府文化財センター　pp.29-32
森屋直樹・亀井　聡（編）2007『久宝寺遺跡・龍華地区発掘調査報告書Ⅶ』大阪府文化財センター調査報告書第 156 集　大阪府文化財センター
山田清朝（編）1995『東武庫遺跡』兵庫県文化財調査報告第 150 冊　兵庫県教育委員会
山本　昭・西村　歩・田代克巳・村川行弘 1985『山賀遺跡』　近畿大学

山本　昭（編）1989『近大山賀遺跡Ⅱ』　近畿大学

横山浩一 1959「手工業生産の発展・土師器と須恵器」『世界考古学大系第三巻』　日本Ⅲ　平凡社　pp.125-144

吉井秀夫 2002「朝鮮三国時代における墓制の地域性と被葬者集団」『考古学研究』　第 49 巻第３号　考古学研究会　pp.37-51

渡辺昌宏（編）1985『美園』　大阪文化財センター

Baillie MGL. and Pilcher JR.1973 A simple cross-dating program for tree-ring research. Tree-Ring Bulletin 33.pp.7-14.

Buikstra J.E. and Ubelaker D.H.1994.Standards for Data Collection from Human Skeletal Remains.Arkansas Archeological Survey Research Series, No.44.Fayetteville, Arkansas.pp.15-20.

【図版出典】

図１：矢野・相馬作成

図２・３・５～７・９・11・12・14 ～ 16・18 ～ 33：原図は調査参加者作図・相馬が一部改変の上トレース

図 34 ～ 37：荒田作成

図 38 ～ 40：高椋作成

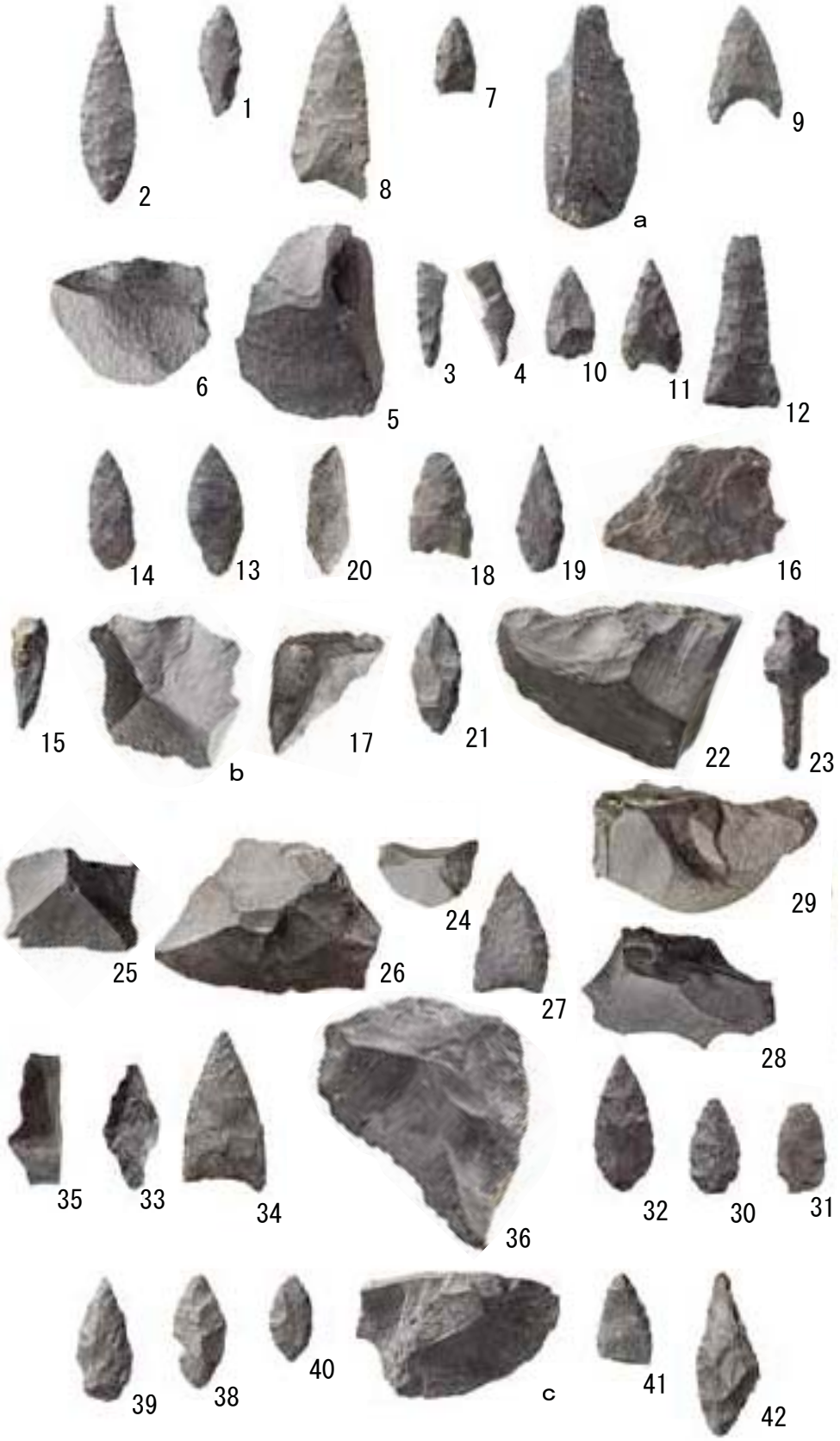
図 41：星野作成

表１～５：相馬作成

1:SZ402 墳丘内（図 12－37）
2:SZ402 墳丘内（図 12－38）
3:SZ403 墳丘斜面（図 16－45）

4:SZ405 北側周溝内（図 22－69）
5:SZ408 東側周溝内（図 27－85）
6:SZ408 南側周溝内（図 27－88）

写真図版 1　方形周溝墓出土土器



写真図版２　方形周溝墓出土石器（番号は図 34 ～ 37 に対応・ａ：ＳＺ 402 墳丘上・ｂ：ＳＺ 404 西南斜面・ｃ：ＳＸ 403 東）